

しまふ。やはり雅客に清鑑でも仰ぎたいといふならば、全くの未知數のものとして、靜かに謙遜の態度で以つて教へを乞ふべきである。そこに客の心境に自由な天地を與へ、存分批評の出来るゆとりを残しておくべきであると思ふ。

次にはこれと反對で、客の方がその陳列された硯に感心をする、主人の名硯を拜見するや否や、思ひ懸けもない古硯、名硯にぶつかつた處から、心の思ふが儘に率直に發表することがある。又品物の香ばしくない時は多少主人の心中や氣持を察してやり、悪し様に言ふとだけは差控へてゐる。それが本當である。そのやうな場合に、客によると、拜見してゐて、これはこれは珍硯でござる。天下の珍でござると評をしつゝ微笑してゐる人がある。これは全く一つの皮肉を示してゐるとも見らるゝ。珍、必ずしも名硯と見てゐると限らない。珍らしいとは滅多にない駄硯である、凡硯であるといふことなのだ。言葉を藉りて唯天下の珍であると、珍の字を用ひただけのことなのだ。こんな凡硯駄硯は珍らしいとの皮肉な言ひ方をしたものである。

處で世間には名硯、それもどうといふことのない普通の名硯に對し、これを非常に褒めちぎる者がある。支那の慣習では、人の寶藏してゐる珍寶を褒むる時分に、餘り激賞の語を用ひることは考へものであるとしてゐるのだ。程ほどに褒めておけばよい。若し假りにその寶物に對し口を

極めて天下第一硯なりなどと褒めちぎる時には、それは結局その客に野心のあり、自分のものとして頂きたいといふ腹があるとの意味にとられる虞れがあるのだ。客がそれ程に褒めちぎつたものであるならば、主人としてたゞ黙つて居れぬ。贈物として御土産に包みませう位の事は云はなければならぬ氣持になる。こはよくあることだ。かうなつては卻つて客自身の意志にも添はないことになる。況んや褒めちぎつた言葉の結末が、かやうなことになつた爲め、折角訪ねて参つた客が自分の立場として内心困つてしまふ事が時折り起る。これは獨り名硯のときばかりでない。行つた先のうちの書畫を見る場合に於ても同じことがあるのである。支那の人と古名硯を談ずる時は、現品を前にして、この點は多少心得てゐる方がよいかと思ふ。

次に趣味の高い老人を客として招き、その來訪の記念に古硯でも贈りたいといふ場合があつたとする。さういふ時は硯にもよることであるが、ならば仙桃の彫のあるものを贈る方がよい。老人の長壽吉慶を言祝ぐ意味にもなり、又その老人に對する禮儀にも叶ふ譯である。若しまた他の名硯であつた場合には、高雅な趣きの見えてゐる古硯であれば何よりである。と云ふのは、老年で少しく趣味の高い人であると、その手許に集められてゐる古硯は先づ左の如き姿、或は刻をしたものを見るのである。即ちこれらは古典的なものであるが先づ、

瓜操、箕様、仙桃、瓢様、龜、圭、笏、古琴、辟雍、井田、雙魚、八稜、竹節、琵琶、日月、呂様、古鼎、蕉葉、雲月、佛手柑、殘月

などである。そのほか銅雀臺の古硯、未央宮の瓦硯などと稱せられるものもある。勿論これ等は古硯の姿を上に述べたところでも付加へて云つておくべきものであつたのである。が、とにかく云つた古琴であるとか、芭蕉の葉、或は雲月、殘月、佛手柑といふやうな風雅なものが圖柄に現はされてゐる。普通名硯のうちによく見らるゝものである。かう云つた聯想の美しく、且つ品の高いものであれば、これは假令老人でなくても、文人墨客でなくても贈物としては適當なものとなるのである。

一體、古名硯は、その贈物とする、しないに拘らず、愛硯家の愛玩せんとするものであるから、先づ之を風雅な名硯のうちに入れて考へることが出来る。なほ古硯の傳來縁起としては、文徵明の古硯だとか、或は米市（ベイク）の古硯であるとか、いろいろ相當由緒のあるものが、その恰好の如何に拘らず、喜ばれるやうである。

かゝる趣味の高い風雅なる古名硯は、自然愛硯家が珍重をしてゐるものである。これを客の前に發表したいと思ふのは情である。けれども、若しさういつた時には程度を考へて褒めておくことを心得てゐるべきである。この事を一言しておくのである。

二 函 書 き

愛硯家が書齋で、名硯を使用する場合には、言ふまでもなく、これを可愛がる意味から、その硯面の下に布を敷く。金襴緞子の布を敷く人もあり、緑の羅紗を布くものもあり、いろいろのものが敷かるゝのである。がこれは品のよい布を恰好よく、紫檀の框内に敷くべきである。硯を趣味的に扱はんとするときの一つの型でもある。もし古硯の裏が深く抉ぐられ手が挿入せらるゝやうになつてゐるものでもその脚部は厚き布を敷いてやるのである。それから蓋は硯を使用する時以外、いつ何時でもちゃんと蓋をするのがきまりである。その蓋は紫檀、或は紅木で作られ、又時にはその蓋の裏に黒漆のかゝつたのを使ふ。少しでも硯面に硬くあたらないやう工夫をしてゐるからである。またその蓋には風雅な圖柄、山水、瑞鳥、花卉といふやうなものが施されてゐるがある。又外函に對してはその古硯の嵌め込みになつてゐるところの布類とか、又自分の愛してゐる硯の手入れとかについて出来る限り色々と工夫が凝らされてゐるやうである。

また名硯を扱ふに當つては第一すべて硯と云ふものは、日向を嫌つてゐるのである。だから日

向に出さぬことである。硯に對する愛玩ぶりは、人によりそれぞれ變つてゐるのだが、その扱ひ方について、それぞれ癖があり、特徴がある。又氣の配り方にしても相當神經質なものがある。日本では古くは硯は蓋をするにも一つ一つに軟かい和紙を當てゝから蓋をしてゐた。そしてそれを桐の箱に納めてゐた。古い由緒ある外箱に納めるなどはよいことである。大事にするものは時に名流に請うて函書きをしてもらふものがある。よい事である。

三 古硯老舗

日本では硯函のことは「當り函」と云つてゐる。これは縁起を擔いだものが云ふのである。が、かういつた言葉を喜ぶ人もある。かたがたよく廣くかくの如く呼ばれてゐるのである。硯(スズリ)といふのは墨をするスミスリといふことから約まつた言葉であると云はるゝが、さういふ意味で支那の硯の字が之に充てられてゐるのである。ところが支那の言葉では之を單に硯と云ふだけでは足りないものと見え、之を北京の發音では「硯臺」(エンタイ)と云つてゐる。若し日本人が支那に遊び、古玩店にまわり、硯を求めようとする場合に『好硯臺有沒有』(好硯臺有沒有)と云ふのは、あちらで普通使つてゐる支那語なのである。かやうに硯臺といふ言葉が使はれてゐる。

北京あたりの骨董店では、大抵平和の時なら相當な古名硯が陳列されてゐる。若しその店頭に見えてゐなければ、奥の後房にあつたものだ。相當陳列してゐた老舗もかなりあつた。若しその主人、番頭が自分と顔馴染みのものであつたとすれば、いきなり奥の部屋へつかつかと這入つて行つてもよい。それは構はないのである。その時、古名硯の相當なのが目に止まつたとすれば、いきなりその方に視線を注ぐ。すると主人は商人のことであるから、直ぐそれと察し、こちらの見てゐる古硯に向かつて、商談を進めて來る。然し店にもよる事だが、いきなり目指してゐるものに言葉を向けると、高く吹きかけられたり、こちらの心持を見抜かれたりして困ることがある。それ故、いきなりそれを目指して話すことは考へものだ。むしろ他の石の話から段段その方へ話を向けて參る方がよい。古名硯といふものは、どこに在つても、三度、五度と、よく見直すことだ。その方が間違ひない。いくらよい古硯、名硯であつたとしても、天下一品といふやうな優品であると、普通いきなり行つて直ぐ見付かるものでない。どうしても幾度か無駄足をしたり又無駄な石をいちつたりしなければならぬ。何れにしても、ゆつくりしなければやりそこなふ。これは古硯で苦心をした事のある者は、みな感を同じうすることである。急がない時には、ゆつ

り観る事だ。それが本當に名硯であつた場合には靜かに持ち掛くる。名品に對してはかうゆかなければならない。かうしてゐると、層一層名品の求めらるゝ機會が得らるゝわけである。

四 古硯外交

愛硯家は自分の集め得た古硯、名硯について、それ／＼その苦心談をする。又その特徴を書き記して一冊の手控にしたりする。これはどういふ點から見てもよい事である。一寸考へると、面倒な事のやうであるが、後になつて見ると、その努力がとても効果を奏する。出来ることならば藏硯の『硯譜』でも作つておくことである。それはその様相、彫刻により、或はまた在銘などによつて分類して作るのもよからう。なほまた硯に關する文獻古書を漁り、これと比較對照して古硯と共にしておくのもよい。その自ら硯譜を作るに當つては、氣の向いた時分には自分で拓本をとつておくことである。その拓本のとり方は普通の方法でよいのである。けれども、模様が入り込んでゐると、細かい適當な紙質を選らんでかゝなければならぬ。硯面の細かい特徴は寫眞を以つてしても本當の姿は明かにすることが出来ない。やはり拓本の面には相當細かい彫刻の局部を出すことが必要である。丁寧な手拓本は、とても貴重なものである。支那大陸の愛硯家はか

うした手拓本の硯譜を拵へ産硯家の間に頒つてゐる。さうしてお互に古名硯の硯譜を交換し合ふ。之によつて硯の研究を進め、旁以つて一つは斯道の爲め、一つは又自分の長壽法ともなしてゐる處は目出度い。

また金のある老人であると、この手拓本の硯譜を、單に石刷の紙で書物にまとむるばかりでなく、大部のものを印刷し、堂々たる表紙をつけて市場に賣り出すといふ方法までとるものがある。この點で上海愛文義路愛麗園の哈同で出してゐる藝術叢編、倉廣硯録などいふものはその中の雄なるものである。内容は手拓本をそのまま、原寸で印刷に付したものである。最も信頼するに足る資料である。その中に載録されてゐる謝枋得の大硯の如きはかなり評判のよいものである。

かういつた硯譜を印刷したり、また自分で古硯の記録を作つたりすることは、日本では餘ほどの熱心家でゝもなければ出来ないことのやうに考へられてゐる。しかし現に大阪では湯川醫學博士の如き、自身に珍藏するもので硯譜を作つてゐるゝものが現にある。而かもその藏硯は悉く色刷りで原色を出して居らるゝ。帙入りにした相當力の籠つたものである。或はまた千葉縣佐倉の佐藤醫學博士は東京順天堂病院の元祖をなしてゐるゝだけに、醫學上の文獻はもとよりその方面にわたり奥深い方であるが、古硯に關しても相當深い古文獻を漁り、一冊に纏め謄寫版にし

てゐらるゝ。先年愛硯家の間に配つて呉れたことがある。かやうにして先人の間にもぼつぼつ現はれてゐるのであるから、今後は幾十面、幾百面と珍藏してゐる雅人は、一面の古名硯に散財をしたと思つて、思ひ切りかやうな方法をとらるゝことが望ましい。又どの位硯石界のためそれが裨益することか分らぬ。況んや日支事變の將來性を考へて來ると、どうしても日支兩國は有識者同士、ピッタリ結合させなければならぬのである。理窟はともかくとして、趣味外交の上からいつて、こは是非とも實現させて欲しいものである。

五 端溪、獅子の置物

世の愛硯家の中には、風の變つた横紙破りがある。それは端溪の古硯中、氣に喰はないもの、或は粗勿をして取り落とし割つてしまつた斷片、又鎌倉端溪などの如き畑の中から掘り出したもの、さういふ破片を利用して小壺を作つたり、或は自分の認め印を作り、又ひろく印材に應用したり、そのほか之を文鎮にして見たり、また机上の置物にして見たり相當凝つたことをしてゐる連中がある。これは外の石材では興味がない。名硯中、王座を占めてゐる端溪の石材破片でなくては意味をなさぬ。端溪であればこそ、そこに意味をなすのであるとする。かういつた意味から

山東省の紅絲石などで印材に仕立てたものがある。また歙州の羅紋石で以つて獅子の置物を作つたものもある。さう云つた獅子の置物で自分の愛玩してゐるものがある。かういふ趣味も相當徹底した程度に進むと、それから先は何が飛出すか分らないのだ。けれども文人の趣味に溢るゝ力は何處までも濺刺、行くところとして可ならざるものはないのである。

六 古硯の修繕

愛硯家は平素自分の使用してゐる名硯の磨面がだん／＼すり減らされ、底光を見るに至るときどうするかの問題である。がこは初めのうちこそ發墨がよくても、石の肌はその鋒銛の消え行く事を示すものである。墨はよくすれても、その墨色が出なくなるのである。かういふ時には誰れしも氣になつて仕方がない。その時は肌の分子を再び起こし目立てをする。磨面の目立てをやればよいのである。それには砥石の合せ砥で以つて試みるもよい。或は上に述べたサウンド・ペーパーの最も細かい零番を使用するのもよい。けれども一等安全なのは、數多く取扱つてゐる硯工の手にかけて直すのが間違ひない處である。

なほ補硯のことであるが、支那では端溪の石の角が缺けて、なくつた時などは、その端溪の石

を粉にして、これを煉り細工にして補ふのである。割れた硯の直しはそれで済むのである。ところが、假りに名硯の磨面が二つに割れたとする。名硯であると、補ふ方法がない。焼き継ぎするわけにもゆかない。がしかし漆細工で旨くやれば修繕が出来る。漆も同じ色の漆を用ひなければ際立つて仕方がない。實際そこに苦心を要することは言ふまでもないのだが、これも硯工の手に委ぬるの外ないのだ。どうせその一度割れた物は、いくら名硯でも元の通りにはなるものでない。直したところで見ても大體恰好がついたといふに過ぎない。若し主人の知らないうち來客の見えて名硯を清鑑しそのうち粗勿をして割り直ぐ修繕したとする。でもその硯を爪で以つてコツコツやつてみるなら音が變である。その音によつて瑕物たることがわかるのである。若しかゝる修繕した古硯を取扱ふ如き場合には、特にその邊の注意が要るのである。

かういつた漆の修繕は眞面目な意味での手入れなのである。けれども、中には悪戯で以つて石眼その他に目を付け取り返しのつかぬ事をするものがある。勿論かゝる行爲は努めて排斥しなければならぬ。こゝには眞面目な愛硯家の氣持になりその心境を思ひやり、これだけのことを付加しておく。

七 硯の趣味は家庭から

愛硯家の硯趣味は單に主人ばかりでなく、家族一般にもあつて欲しい。あの重たい品物の出し入れの必要を考へて見ても、その妻子家族のものにも楽しみを分ち、一家團樂の對象物と致したいものである。何もどうといふ悪い道樂ではないのであるから、若し家族の雰圍氣がそれに向かつて來るならば、次第に家族のものにも諒解させ、その取扱ひぶりは無論のこと、石質、石品のことから、その刻のこと、銘のこと、時代別のこと、地方別のことなどまでをも説き聽かせ、出來れば地圖を廣げて、その産地の何省であるかをも明かにしておくことがよろしい。また古硯はいろ／＼な種類別も出来るのだから、その邊についての常識を養はせておくとすると、非常に助かるのである。

支那ではどこへ行つても、城内の料理店であらうが、旅館であらうが、その帳場には、相當な硯が備へられてゐる。見ると硯と云ひ、またその墨のすり方と云ひ、筆の扱ひ方と云ひ、存外鄭重である。筆をとつてゐる處を見ても、品のよい場面に出會はすことがある。料理店の番頭ですらも、それが家に歸へれば相當な硯や筆を備へ、粗末な扱ひはして居らないだらうといふこと

が之で分るのである。毛筆を使へば、あとは必ずそれを筆帽に納め、穂先の乾かないやうに注意をしてゐる。それ位の嗜みが見らるゝのである。今日ペン、万年筆の時代に移つて了つた日本として今之を見ると、多少日本でもこの古硯趣味を家庭的に廣めたらと云ふ氣がしてならぬのである。

八 ホテルに客用大硯

愛硯家ともある人ならば、誰れしも考へてゐることであらう。旅行をして旅館に泊まる時、或はホテルでゆつくり休み、殊に雨に降りこめられて、訪ね來る客もないときめてゐるとき偶然にも面白い珍客が見える。すると雨を聞きながら筆でも執つて悪戯しようかといふ話が出る。それでなくても記念に一筆書遺して呉れないかと要求せらるゝことがある。かやうな際にホテルの支配人に部屋から電話をして見ると「硯はありませんか」と「生憎くカウンターにもペンとインクばかりで、その用意はありません」といふ。假令あつてもお話にならない粗末な小硯で、それが不景氣な硯函に入れられてゐる。仕方なくそれが届けらるゝ。

大きいホテルでありながら、こんなことでは仕方がない、云々といふ。すると墨汁の瓶で半分

以上も使ひ果たしてあるやうなものを持つて來る。これもまた駄目だ。仕方がないねと云つて持つて返へしたことがある。これは關西一を以つて任じる〇〇〇ホテルに泊つた時の實話なのである。某方面から行つてゐる支配人の君にも、そのことは希望として述べておいたのであつた。恐らくは中華民國からも汪精衛主席、その他名流も今後は續々と見え泊まられることであらう。大阪の名に於ても、東亞新秩序、國民外交、文化交流といふ點から云つても大事なことである。さうその歐米式のペン万年筆のみに走つてしまはないで、東洋個有の文房具を顧るくらゐの事は考へられて欲しいものである。この希望は、自分ひとりだけではあるまい。一層こゝに聲を大にして要求してやまないものである。その硯石は出来るだけ大硯であつてほしい。而かも石品は良いものが備へられて然るべきであると思ふ。この點はホテル、旅館ばかりでなく、大きい料理店にしても、硯、毛筆、墨、文鎮といつた位のもは用意しておかれないものである。

かやうなことは、愛硯家でなくとも誰れしも氣付いてゐる事だ。餘計のことだとして口に出さないでゐるだけのことである。そのまゝにしておくならば、東亞文化の文字方面、古硯方面が姿を消してしまふことになる。そこに氣が付いて見ると、小さい事ながら忍べないことだといふ氣持がしてならぬ。

九 卓上揮毫

こゝに自分の體驗からなほ一つ付加へておきたい事がある。それは、禪寺の話である。禪寺に泊ると、山寺であらうと、名門、舊家であらうと、支那の人々の氣持は尙硯に反映してゐることがよく判る。又大抵の家庭には相當な硯がどこにも備へられてある。そのため、いざ墨戲を試みようと思ふと、そこは山寺の和尚も承知してゐるし、名門の主人公も判つてゐるしするので、直ちに大硯が持出される。またさう言つておけば、直ぐ磨墨が始まる。無論あちらは日本のやうに部屋に疊が敷かれてゐるといふわけではなく、すべて卓に几であり、書くにも下を向いて低い所で書くといふわけではない。堂々と立つてゐて、脚の高い卓上で書くのである。だから、その點が至つて樂である。日本のやうに俯伏せになり、窮屈な思ひをしながら書くのとは違ふ。支那の脚の高い卓上で筆を振ふのであると、仲々として懸腕直筆で以つて自由に揮ひ得る。

十 蘇州拙政園の墨場

蘇州城内で、史上に知られた古い拙政園といふ名所がある。今は江蘇省の主席のゐる處となつてゐる。又省政府の所在として知られてゐる處であるが、昨昭和十五年春、自分はそこにゐた。當時省主席を勤めてゐた陳則民先生から迎へられ、その拙政園に逗留してゐたのである。そこへ集り來たる連中は、いづれも大官たちの錚々たるもの、或は文人墨客、または名流たちであつた。中には東京の帝大文科（史學）を出て役人をしてゐる某君もあり、思ひ出の深い清遊が省長の名によつて催されたのである。陳主席からあの廣い庭の石橋や、また幽亭に案内されたのであるが、如何にも大規模の庭園であるだけに觀どころの多く、殊に書の見事な軸物や扁額を鑑賞したのであつた。よくその聯の句に

溪 靜 雲 生 石

窓 虛 月 弄 紗

といふのがあつた。が、全くその通りの状態が見らるゝのである。溪は靜かにして、雲、石を生じ、窓は虚にして月は紗を弄ぶといふ言葉そのままに、清らかな趣きが庭全體に漲つてゐる。その日は午後から夜分にかけて、自分に與へられた大室に紙がひろげられ、美事な大筆が持ち出され、また豫ねて用意されてゐた大硯が出て來た。見ると端溪長方の抱眞硯で、如何にもこれ有るかなと思つたのである。餘りに褒め過ぎてはどうかと思つたから、好い加減に結構な名硯であると言

つておいた。しかしよく墨もすれて居つたし、古硯の氣持もよかつたし、場面が總べて愉快に展開して来たやうな感じがした。それ／＼向ふの大官文人たちから老人達も、淀みなくすらすらと揮毫せられたのであつた。自分の爲めに贈られたのもあつたが、好記念に自分はあちらで表装を依頼しておいた。遠からず東京小石川の手許に届いて來ることと思つてゐる。

愛硯家諸君もかうした實際のあちらの場面に踏み込まれ、したしく文人の墨場にて古名硯がいかに重きをなしてゐるかを味ひ、またその雰圍氣をいかに力強く古硯が導いてゐるかを親しく見られたい。かうあつてこそ始めて、名硯の存在價値は倍加せられ、今から十倍、百倍とその効果を文化的交流の上に現はして來るものと信じて疑はないのである。

十一 なじまぬ文房具

今から十數年前のこと硯友先輩加藤拓川翁が、木堂翁その他の文雅の士と清談文墨小會を催した席上、よく云つてゐた話が今だに耳に残つてゐる。曰く、

大阪や名古屋で心友を訪ねると、よく珍らしい端溪小硯を見せられる。石の質、傳來、形態、どこからどう見ても點の打ち處のないがあるので、そのとき硯を激賞せん爲め、どうかする

とわざと唯惜しむらくは之にたつた一つの缺點がある、と云ふと、相手は是非その缺點を指摘してくれと云ふので即座に聲をさげ、その缺點と云ふのはね、持主がふさはしくないと言ふのである、と眞向から浴せかけてやる。すると、大抵ギヤフンと參つてあたまを痒いてゐるよ。云々

木堂翁も言葉の鋭鋒をよく現はす事では人に負けぬ方であつたが、拓川翁も相當なもので、それで洒脫味たつぶりの處があつたから、誰れ人も拓川翁からどう云はれても立腹したりする者はあなかつた。

いくら古名硯を寶藏し珍玩してゐても、その持主が柄になく風流味の足りない俗人であるとする、全く名硯の方で泣く。石に情ありとすれば他に嫁入りでもしたくなつたと云ふかも知れぬ位のものである。拓川翁は暗にその名硯をこちらへ寄越せと婉曲にほはせるつもりで云つたのではない。決して爲めにせん爲めに云ふやうな柄のわるい人ではなかつたが、そのからかひ方はよくやる手であつた。どうかすると愛硯家の古硯をひどく鍾愛してゐる人から、どうか拓川先生、鑑定してもらへませぬかとお願をするものがあると之を拓川翁、褒めまいものか、馬鹿にほめて、これは君、實に珍らしいよ、天下の珍だ、珍中の珍だなどと云ふ。この言葉は拓翁の自らよく繰

返して云ふ言葉であつたのだ。が、どうやら少々變なので自分はあとで拓翁にどうしてあんな駄硯を褒めちぎつたのですかと水をさして見る。するとニコニコし始めた拓翁の答が振つてゐる。

それは君、あんな駄硯は天下に滅多に見ぬ。どこをどうさがし廻つてもある氣遣のない位の品なのだから、珍中の珍と云つておいたわけだ。世人はよく非凡と言ふ語を使ふことがあるが凡に非ざる人間のうちにもその凡の上に出てゐると凡の下にゐるのがある。下にあるものは矢張り非凡のうちにあるわけではないか。だから珍と云つても必ずしも上等逸品と云ふ意味に限られてゐると見ないでもよいぢやないか。

でなあるほどと吹き出したことがあつた。全くその通りなのである。

いくら文房具古硯をひねもすひねくつてゐても一向にその人柄にうつらぬ事がある。最後にはなじまぬわけでもなからうがどう見てもシツクリ來ぬ人がある。財産のつもりで愛藏してゐる人にそれが多し。又折角田黄や雞血その他の結構な印材をもち愛撫してゐるものがあつても、これ亦印材の方でぎこちなく思つてゐるのがあるかも知れぬ。と云ふのは折角その名もゆかしい巨匠に刻つてもらつた見事な篆刻の印面そのものには申し分がなくても、その人の自作の書なり、畫なりに捺されてゐる時の印泥（朱肉）の色あひを味ひ見ると云ふと丸でひどいのが使はれてゐて、

これでは全く印泥に全然おかまひない方のかたであるのか、それとも印泥の用意の全然ないかたであるのか、その邊の疑はれてならぬ人がある。

支那では詩文、書畫、篆刻三拍子揃つた文人でなくては文人の中に數へられぬ位に思はれてゐるだけに、印泥であれ又た硯であれすべてに通曉してゐるものが多い。矢張り本場は争はれぬものである。筆紙墨なり書齋なり、その環境なりがその人によくなじみ合つてゐるのであるから、板についてゐるとでも云はれる。従つて見る目もなごやかに感ぜられ一段の清興を覺ゆる次第である。あちらの文人墨客は所謂酣縱の氣分に達してゐるならば文房具の形などはどうあらうと又關防の印の捺し方はどこへ捺さされうと、その心の赴くまゝに行く。決してぎこちない囚はれた型と言ふものがない。つまりこれはその文房具なり又書畫なり、その翰墨の雰圍氣やその人の血液なり肉なりが全く融合してゐるが爲めに、さうなれるものであると斷定せられる。持つて來てひつ着けたやうな處がない。さうした連中の間にいつも浸つてゐると云ふと、その背景に見る聯句とも一脈相通じてゐるものがあり、うれしく思はれる。聯に曰く、

月移竹影侵棋局

日透花香入酒樽

とあるのである。僅か十四文字ではあるが、これが文具にも主人にも又その來客にもその部屋にも、又その日常生活にも、ピツタリ來てゐる。文房至寶はかう云ふ處に收まつてこそ、始めてその生命が發揮せられるわけのものだ、と云へるであらう。

十二 けなげな端溪心事

硯石は口がきけないとは云へ、心靜かによく情を打明けてゐるやうにも見える。得意満面の名姫もゐるが、又かなり氣まづい思ひをしてゐる手合もある。昔、王昭君は、漢使却回す、よつて寄語す。黄金何れの日か、娥眉を購はん。君王若し妾が顔色を問はば、いふなかれ、官裏の時に若かずと、漢室から匈奴へ人質にやられた美人の身の上は誠に察するに餘りある者がある。敢へてこの容色の衰へてゐないところを皇上（ホワンシヤン）に傳へてくださいねと可憐の言葉を洩らしてゐる處實に詩的である。豈これは王昭君ばかりでない。李白の筆を以つてしたなら、端溪紅絲、綠石だち老姬にしたつて、その幽居の情を叙べて、餘すところなきまで盡させたら、きつと山ほどあるであらう。

若しも世が世であつたなら、文家のものども、官裏の長夜の宴の別室に侍することも出來たで

あらう。一門の毛穎や楮先生や墨卿あたりと君側で寵愛を恣にすることも出來た筈だ。平和な時代であつたなら、北京前門外（瑠璃廠）海王村公園あたりに出掛けてゐても、時めく文人どもの來訪を受け月下に琴書の雅談を交へなどしたものである。今はけばけばしい客の歴訪を受くることあるが、清香な客は殆んど跡を絶ち、淋しく後房に幽閉同様歲月を送つてゐる。せめて自分の顔色を尋ねて呉るゝ人でもあつて欲しいのだがそれさへない。どうかするとその姿の香ばしくない仲間が行き榮えもしない客の爲めにどこへか伴はれ、千里の外に出かけて行く。

日本に渡つて來てゐる老姬端溪たちは時に名流のお聲がかりで大奥御殿へお伴することあるも、どうかするとかく取り残さるゝ。世間が端溪どころでないとして、聲を掛くる事すら遠慮してゐる向きもある。しかし世の中がかう何から何まで味のない時勢になつたからとせめて肌の細かいのを傍へ寄せ侍らせようと云ふ者も偶に出て來る。けれどもそれも世を憚りつゝの心なしである。中には胸にしつかりした倚るべきものを持ち合はさず、又先がどうなることやらと心もとなく思ふ者どもの間では、せめて高雅な風懷でも味ひ流芳幾久しき空氣の間に生きんものと念じてゐる心構へから自分を近侍させて呉るゝものもある。

中には云ひにくい事であるが、折角黄金で娥眉を購つておきながら、そこにはそこがあるとか

にて、大ピラに主の本邸へ連れて行つて頂けない者もあるのだ。身が重たい上に冷めたいと云ふことの爲めなのであらう。が又經世済家の大浪に影響せられてゐる爲めのやうにも思はるゝ。購はれた身であるなら當然、落付く處へ落付いてよい譯だが、そこがさうは參らぬ。文家華やかなりし頃とは今は丸きり違つて來た。こぼしても始まらぬ事だが、さうまで變つた世の中となつたのだ。然し世の中が世の中だから今日身どもは持つて生れた美質を抱持し唯徳を磨き、一旦緩急あるのとき御奉公が出来るやうにと決心を固むるに在るのみである。せめて東瀛の和名姫たちと力を協せ、文家の爲めに一死報國の誠をいたすの外ない。せめて中日國交の上で端歎めいめいが交驩清遊の折、仲介の役割りでも荷ふことが出来れば幸せ之に過ぐるものはないとする。

元來身が冷めたいちだとは云へ、肌には水みづしい潤ひがあり、濃かや處があり、血色のよい薄桃色のところもあり、涼しげな眼もある。持つて生れた天稟はこのまゝにして朽ちさせるのも惜しいものだ、他から云はれてゐる。王昭君は蒙古族の匈奴に行つたと云はるゝが端歎は神國日本に使用してこよなき天の使命を果さうとしてゐる。世界情勢や東亞の風雲は闇憺としてまだ止むところに行かないのだが、端歎の固く志すところは凜乎として富貴も淫する能はず、武威も屈する能はざるものがある。誠に頼もしいものを持つてゐる。いくらその風雲急を告ぐるものあ

らうとも、天の與ふる資質を以つて中日兩國永遠の和平促進の爲めに又墨郷開國の使命達成の爲めに身を粉にし、骨を碎いても御役に立つやう報國の赤心を盡したのである云々と申してゐる。やゝもすると滔々たる世相は、殷岐・萬年嬪などいふ變通自在の腕利きの横行潤歩を見せつけられ文家一統はかなり恐慌を來たしてゐるのである。がしかし中國の全土と日本の一部には尙端歎・毛穎楮氏墨卿の傳統と親しみから離るゝ事の出來ぬ情味が漾ひ、世はどんなにハイカラにならうと依然東亞文化の本許文家の信賴地に墜ちず、英米の人氣香ばしからぬ昨今の氣勢からどうやら文家の一統は何れも息を吹き返した感すらある。世はメートル法の迷夢から醒めて尺貫法の本然に復歸すると同じやうに暫し疎んぜられてゐた歴史の長い文家のそれぞれがどうやら再び役割りを買つて出場するの機運となつた。學者官界から經濟界一帯にかけての傾向は、古來の文家の出るべき舞臺面を減らせるやうにのみして來た。僅かに東京上野山晴れの書道展の檜舞臺が催されてゐるので若い者どもは多少忙はしさうにしてゐる位のことである。端歎大奥に納まつてゐるもの共の私かに斷腸の思ひをしてゐる一伍十什は知る人ぞ知るである。こゝにはけなげなる文家の老姫端歎あたりの心事を憫察して書き記した次第である。拙著文房至寶（雄山閣）、東坡の萬石君羅文傳參照の事。擬人法によりかく思ひを述べたる次第である。

二十 寺子屋の用硯

一 童子小硯

支那の寺子屋にも新らしい近代的な空氣が近頃は大分漲つて來た。しかし、その裏の流れを見ると、尙古來そのまゝの風習が大きな存在として潜在してゐるやうに思はれる。寺子屋の先生達の中には若い近代的な教師もゐることであり、またその地方の村夫子を以つて任じてゐる昔ながらの名門もゐることである。従つて紙や墨・硯のことについて話をしてみると、相當よく理解し、呑み込んでゐる。例へば紙は澄心堂の紙、墨は李廷珪の墨、硯は龍尾と云つたこの三者は昔天下に冠たる者、有名な文房具となつてゐたもの。隋、唐から降つて五代のとき李後主が之を稱へた言葉である。これは日本でこそ珍らしい言葉となつてゐる。が、支那では誰れしも知つてゐる語だ。文房具中、紙・墨・硯などの白眉と稱せらるゝものは、蓋しこの邊にあるのでないか。八釜しい端溪の名は比較的後になつて知られて來たのである。

寺子屋のことは、支那で多く「書房」と云つてゐる。書房の先生の中には、極めて近代的の先生があり、また古來の村夫子がゐる。その外に、山寺の和尚さんで自ら手傳つて呉れてゐるものもある。従つて寺子屋には、大きな古硯がある。時折り龍尾の雲龍硯などいふもある。寺子屋をよく訪問することがある。見ると、先生は支那服の着流しに支那靴を穿き、誠に伸びやかな姿で以つて子供に読み方を教へたり地理、歴史の話などをしてゐる。

一たい寺子屋と云ふと、田舎のお寺の一室を借りてゐる。また何でもない普通の民家を借り、一、二軒一緒にしてやつてゐる。或は五つ六つの部屋を有してゐる所もある。生徒の多い處だと、便宜上これらを皆教室に充てゝゐる。その部屋の窓から覗いて見ると、澤山の頭是なき兒童が書物を読んでゐる。その聲は川向ふの柳の並木のあたりにまで聞えてゐる。時として、溪流を舟で下つてゐる時分に民家の窓から漏れ來る讀書の聲を聞かされ、よい氣分になつたこともある。そのときは舟を棄てゝ、その寺子屋を訪ねたりする。

寺小屋を訪ねると、偶々習字の時間である。鼈甲縁の眼鏡の先生に挨拶をする。子供が机によつて手習ひに餘念なき様子など參觀する。先生もこちらが字の事につき何かと質問をするに對してよく答へて呉れる。又子供の中には、はにかむ者があり、また傍にやつて來て無邪氣な顔して、

こちらの問ひに答へて呉れるのもある。室内に居並ぶ五列の机にはそれそれ右に硯、左には石刷の手本と定めのおく置かれてゐる。その石刷と云ふは勿論印刷物なのである。顔眞卿があり、文徵明があり、虞世南があり、様々であるが、めいめい思ひ思ひのものを持つて来て、寺子屋の先生から筆法を教はつてゐる。

寺子屋の子供達は何れもおつとりした気持ち顔付きで以つて筆を紙に付けてゐる。そこを先生が朱筆で以つて直してゐる。紙には朱線が引いてある。天なら天、地なら地といふ字を書く時、斜の線のどの邊から筆を打込むか、最後はどこで線を止むるか。その筆の位地を定める爲めのものである。これで充分いく度も習ひ込むなら必ず旨くなる。稽古をして怠らなければ、手本と同じ書が出来上るやうになる。根氣よくそこまで到達させるやう、寺子屋の先生は氣永く仕込んでゐるのである。童心の鍛錬は先づこの點に重きが置かれてゐる。これと同時によく判ることは、その寺子屋で古硯を尊重するの氣持が重んぜられ、それが何んとなく藝術に無關心でゐられなくしたことである。これは兒童たちの銘々娛しんで墨をすることを想像せしめる。かういつた書道訓練は家庭に於けるそれと、寺子屋に於けるそれと、共に平行して考へられてゐる。

寺子屋に限らず、家庭にありても、子供が讀書をしたり、字を書いたりする時の卓子はその作

りの板からして厚いのが用ひられてゐる。その書く文字は太くどつしりとしてゐる。それのみならず、その部屋の壁を見ても、或は塀を見ても、窓の形を見ても、皆これ重厚な氣持を漾はせてゐる。その邊が硯石の重厚な氣持と全く合致してゐる。恐らく支那民象の指導もこれら村夫子の氣持も民族性の盛りあがつた力だと見らるゝ。硯石の重厚味もかゝる諸點に調和して見らるゝ譯である。

二 惜字延年の美風

硯石の尊重せらるゝ氣持は、また先生を尊敬する氣持にも繋がりがあり、それが又寺子屋の教室にも續いてゐる。かゝる空氣を察すると、支那の兒童達が、寺子屋で重厚性のたたき込まれてゐることはよい事である。また硯工の仕事ぶりを見ると、その軽い氣持でもつて、鹽の中に粗彫りの硯石を置き、大きい鑿を手にしてゴリゴリと彫り崩して行く。彫つては水をかけ、水をかけては又彫つてゐる。その鹽の傍、臺の上には、寺子屋用粗刻りの硯がいくつも積み重ねられてゐる。これら卓上用の硯はすべて城内となく、田舎となく、あちこちの寺子屋、小學校方面に出てゐる。

支那でこれ程まで深く食入れるこれら卓上用硯の氣持は牽いてはまた筆を愛する氣持にも繋がる。この筆硯愛の氣持が到るところ水村山郭に培養せられてゐるのである。この状態は狭い日本で想像もつかない位ひろく且つ力強いものである。と云ふのは、あちらでは城内街巷のは大街と云はず又横町と云はず路上隨處の壁に「惜字延年」と四文字書かれた扁平の笊が吊されてゐる。その毛筆で墨書せられた紙は反古でも何でも路上で見付かり次第拾つて、この笊の中に入れて呉れと云ふことである。かやうにして惜字のが大事だ。字の書かれた紙は勿體ない。拾つて之に入れた者は一年命が延びるとの獎勵の言葉なのだ。この墨書された反古を集めた籠は、最寄りのお寺に持つて行く。お寺の境内には石か瓦煉で作つた惜字塔がある。紙を焼くための爐なのである。寺の和尚さんは時を見はからひ、之を焼き清めるのである。この反古を焼き清める美風はどこにもある。之によつて益々文字尊重の氣持に拍車がかかけられ、書道思想が培養されて來る。

蘇州城外の寒山寺では「月落ち烏啼いて」といふあの詩の拓本が盛に賣られてゐる。日本人の旅客はよく土産に之を買つて歸へる。寒山寺の拔本のみならず、石刷の類は支那街到るところ何處に行つても拓本屋があつて色々のものを賣捌いてゐる。之により文字書道尊重の風習がわかる。又支那街をあるいてゐると、隨所に見られるあの壁面の墨書である。こは大きな文字が墨黒ぐ

ると書かれてゐる。實は黒漆で筆たつぷりと書かれてゐるものである。が、壁書の規模の大きいものになると一間、二間に達するものがある。例へば上海の質屋や鹽店の前を通ると、路上から見上げるほど高く、墻壁一ぱいに書かれてあるのがある。『當』『官醬』などとあるのがこれである。そのほか「染坊」であるとか「木行」であるとか、或は「糖行」などいふ文字を見る。これ等は日本で云へば質屋、醬油屋、染物屋、材木屋、砂糖屋といった店を示す文字で、それらの商賣向きを知らせるために壁書されたものである。板の看板もあるにはあるが、遠方からはこの方がわかり易いのである。それに板看板は人に持つてゆかれる心配があるのだ。この壁に漆で大書されてゐる方法ならその心配がない。而も行人の印象にも強く映るわけである。

このほか尙政府當局が民間に知らせたい布告文を始め、何でも彼でもお寺の壁とか人のうちの壁とかあちこちの高壁に持つて行つて大書する。この大きく文字を壁書する風習はとも日本あたりで考へらるゝものでない。非常に力強い風習として支那全土の社會に漲つてゐる。これが家庭に於ける硯の尊重の風習と共に意外に強力な翰墨氣分を培養してゐるわけである。そのために大陸住民の思ひを古硯、大硯に打込んでゐる意氣込みといふものは恐らく想像以上のものである。文人、學者方面となると、尙更らさうである。上海あたりの市中をあるいて見ると判ることであ

る。が旅館とか大樓（ビル）とかの壁書と來たら、とても力強く揮はれてゐる。行人は、その大いさと形を見たゞけでひどく心を打たる。書畫に通じてゐる人ならば、一段その魅力を感じることであらう。

されば巷間にゐる文人達の筆跡にしても持て囃され、これ亦古硯の力と共に平行して、強く人心を牽き付けてゐるやうである。かやうに見て來ると、寺子屋を中心とし支那思想の裏に力強く流れてゐる硯石の動きといふものは大體想像さるゝであらう。而かも支那四百餘州に廣く普及してゐる數といふものは恐らく幾百、幾千萬といふものになるであらう。これが廣く深く普及してゐるところに、古名硯の背景の、容易に崩れない潜勢力の存在が認めらるゝ。この事實は誰れ人も拒むことの出來ぬ處であると云つてよい。

日本にありても、弘法大師の書であるとか、橘逸勢の筆跡であるとか、小野道風の書風であるとか、いくらでも古今の史上に巨大な存在として傳へられてゐる墨蹟がある。最近は又全國に東亞書道の復興氣分が盛になつて來た。その中に昔の流れを汲んでゐるものが少なくない。

古今の書道事蹟とその氣持を支那日本共通に取上げ、こゝに靜かに考へてみるならば、最早や古名硯の尊重とその重要性についての主張など自明のことで、議論の餘地はない。寺子屋の子供が

硯に立脚してゐる重厚な民族性も、そこに深く根ざしてゐることだと云へる。云ふまでもなく、支那は流石に文字の國である。一方に古名硯の尊重せらるると同時に、他方には文字をもつて美しく清らかに自分の抱いてゐる胸中を歌ひ詠する。そこに立派なる長所を持つてゐる。そこには面白い聯がある。例へば、一帆、雲、伴となして、千里、月、相したがふと云ふのがあつたり、水清く、魚、月を讀み、山靜かにして鳥、天を談ず、などといふのであつたりする。

一帆雲作伴

千里月相隨。

水清魚讀月

山靜鳥談天。

山靜如太古

日永似少年。

坐領春風娛永日
靜觀流水樂長年。

寺子屋の用硯

坐ながら春風を領して永日を娛しみ
靜かに流水を觀て長年を楽しむ

臨溪流猶聽古樂

過崇山如仰賢人。

溪流に臨んではなほ古樂を聽くが如く、

崇山を過ぐれば賢人を仰ぐが如し

かういつた脱俗的氣分は自分があちらで隨所に水村山村の行脚の間に見出す景色なのである。別段珍らしいとするものでもない。けれども、二度三度と讀み直し玩味して見ると、その何れの句にも含蓄深きものがある。かういつつた文學的な、人生に一貫した理念を持たせるのである。之を抱いてをればこそ、あれほど古硯を愛玩し、又名硯を愛してをりながら、何時でもこれから脱脚し得ることも出来るといふ、光風霽月の氣分も半面に窺はるゝのである。

寺子屋の學用硯については尙申述べたいこともいろいろあるのだが、こゝにはその硯面から來

る背景の力、壯重なる氣象、重厚な氣品、また枯淡な情趣、この四つが兒童達の心境をだんだん作りあげてゆく大きな礎石となつてゐるのだと見る。時にはゆかりのないものの如く見えてゐる片田舎、寺子屋の教室のことなどがにしても、古硯、名硯を述ぶるに當つて穴がち省く譯にも行かない。そこでここに自分の見たまゝを一とわたり紹介したのである。

筆
の
話

一筆について

筆の話は、文房具中の王座を占めてゐる硯の話をするとき、必ず聯想せらるゝものである。筆を使ふものは、必ずそこに硯を使つてゐる。なほ慾を云へば、こゝに墨も、紙も、文鎮も、筆洗、水入のことも出て來なくてはならぬわけである。が、こゝには筆のことに就いて述べ、他は略しせめて、硯の話の場面を幾分か補つて行きたいと思ふのである。話がこの古名硯に對する付録的な追加であるのだから、特に筆そのものの詳細なことは、此處にはなるべく預つておく。また硯と筆だけで以つて一冊に纏め上げなければならぬ紙數上の都合もあるのであるから、詳述したくも出來ぬ。讀者諸子幸に之を諒とせられんことを。

たゞ支那では皆その風習として卓上で毛筆が使はれてゐる關係上、とても筆にあこがれを持つてゐる。羊毛の長鋒を手にしたときのそのニコニコ顔は何とも云へぬものがある。あちらの人の氣分にピッタリ來るものがある。贈物としても毛筆を組みにした函入りのものが色々ある。上品で雅な趣を湛へてゐる。かやうな風俗は支那一般の氣分を味ふ上に參考となることと思ふ。

一筆の歴史

今こゝに筆の話をするに當つて、先づ日本の筆匠の事に觸れておく。日本には東京に平安堂、京都に鳩居堂、九州福岡に復古堂がある。これ等は多少筆のことを云々する者だと、知らぬものはあるまい。また稍や古い明治時代中葉以前の筆匠だと云ふと、高木とか得應とか、いふのが憶出される。

ところで本場の支那の方はどうかと云ふと、天下に聞こえてゐるのは湖筆徽墨の名でお馴染みの湖州の筆匠である。これが一番ひろく名が通つてゐる。湖州といふのは上海西南の水郷で、浙江省の北部、太湖の湖水にほど遠からぬクリーク沿ひの所である。現地に行つて土地の古老の言ふ發音を聞いて見ると「ウ」と響く。日本の發音で湖州といふのは大分異つてゐるやうだ。けれども、これは一つの訛音として認められる。

湖州の筆は、北京でも、漢口でも、支那四百餘州いづれの所にも聞こえてゐる。湖州以外尙幾多の名筆の産地はあるのであるが、湖州の名前が斷然抜いてゐるのは事實である。そこで普通、筆匠の間で賞讃されてゐるのは、湖州のうちでもワンイーピン（王一品）だの、胡文瑞だの、老

文元だの、李鼎和だの云ふのである。又湖州でないけれども、杭州には邵芝巖と云ふのがある。これも有名である。細かいところをいろいろ挙げて來ると、際限がない。湖州の名高い筆匠の看板は上海から遠く北京あたりにも出てゐる。目抜の場所には大抵その支店、發賣所が設けられてゐる。天下の文人でなくとも筆に喧ましい者は湖筆に使ひなれると外の所の筆は使はれないといふ位に之を讃めてゐる。

近來日本の筆にも特徴があると云つて、支那の畫人で日本から大筆を求め持つてゆくものがある。支那に渡つた日本の雅人は小筆は支那の方が良いと云つて、向ふからこれを求め持つて歸るかやうにして、筆の間にも近來日支兩國の間に交流が行はれてゐる。文房具による日支間の最近の接觸は誠に目出度い事である。

次に支那筆の過去の沿革歴史であるが、先づ文字の上はどう窺はるか。今日、法律の律の字を見、建築の建の字を見、また筆の字の起りを見るとする。するとそこに共通したものが判つきり見出される。その共通せる要素は、元來何ものを物語つてゐるかと云へば、云ふまでもなく、それは中心に長く棒の如くに軸となつてゐるものがある。即ちそれは筆の管なのである。原始時代の古い象形文字を言ると、それはちゃんと筆の穂のあるもので、之を手で以つて握つてゐる。その

恰好が想像されるのである。律と云ひ筆と云ふ、それは共に筆に關係してゐる語として認められてゐる。これは古代の頃からさうであつたと見らるゝ。初め「ブルツト」 Plut とでも云ひたいやうな語があつて、これが分れて「ピツ」になつた。古くは又「ヒツ」秦の頃不律とある物になつて現はれてゐたといふやうに考へらるゝ。さういふ發達の徑路を辿つて來たものと見らるゝ。固よりこの考へは假定説であつて、確しかな意見としてこゝに發表するのではない。尙その合字の畫の字を見ると爐（皿）の上で筆が焚かれてゐる處が面白く見らるゝ。火爐の中に火と筆の取り合はされた形は面白く考へらるゝ。

さて然らば史實の上で、毛の穂先を有する筆が何時の時代から存在してゐたのか。歴史の上では秦の始皇、李斯蒙恬の頃から存在してゐたやうに謂はれてゐる。大體これは今から二千二三百年前の事だと見ることが出来る。

ところがそのもつと前で、莊子のゐた時代に既に毛筆があつたことが考へらるゝ。といふのは、既にも述べた如く、莊子、田子房の篇に「筆を舐め、墨を和する」といふことが見えてゐる。この筆を舐めるといふことは、その筆に毛の穂があつたから舐め穂先を揃へようとしたのであらう。と察せらるゝ。この莊子の本文に見えてゐるものが信頼するに足りるとするならば、秦の始皇、

蒙恬などよりもつと古く、毛筆の存在が考へられる譯である。無論その毛筆といふは墨をつけるばかりでなく、或は漆をつけて居つたかも知れない。是れで文字を書いてゐたのだ。それで原始的の象形、筆の字やいろいろな形の者が書かれてゐたのであらう。繪のやうな象形文字もその頃の毛筆で巧みに寫されてゐたことであらうと思ふ。いろいろの古銅器銘を見ると、孔子の時代、或はそれ以前の古い時代の文字かわかる。當時の金文は何れも、鑄銘か削名かであるが、その書くときは恐らく漆を用ひるに非ずして、墨書であつたと思はるゝ。鑄金ものの筆蹟から見るとそれがわかる。必ずしも漆本位の書ばかりでなかつただらうと思はれる。

ところが更にもつと古く掘り下げて見る。孔子のゐた周の時代から更にもつともつと、古い支那歴史を考へ、殷であるとか、更にそれよりも以前の歴史の始まつた頃に書かれてゐた書體を考へて見る。すると、その頃は紙の發明などは勿論まだなかつた時なのであるから、木札か竹簡かである。今現存してゐるものでは主に龜の甲とか、獸物の骨とかいふやうな腐らぬ物に彫付けられてをつたやうである。その時代の筆は固より毛筆なんかでなく、確かに小刀であつた。小刀で以つて象形文字を一々刻り付けてをつたと見らるゝ。これは事實で刀子を筆となしてゐた譯である。この刀子や筆の時代に仕事をしてをつた人を引くるめ、之を刀筆の吏と云ふてゐた。つまりいふ

と、彫刻時代墨と書の時代の、この兩方を含めてかく稱してゐたものと云へる。文字を古い時代の方から云ふと、第一、龜甲時代の象形の書體があり、第二、古銅器に現はれた篆書の時代があり、第三、秦の始皇から漢にかけての隸書の（古隸漢隸八分隸）の時代があつた。以下章、楷、行、草の四體の沿革變遷がわかる。これらはさう一々云はなくとも判つてゐるであらう。

書道史の上からいふと、隸書から草書あたりに移つて行つた時代はいつかといふと六朝の頃である。六朝時代に現はれてゐるもので面白いのは、山東泰山に遺つてゐる金剛般若經である。一字の大きさが一尺以上もある大字で、呑みぶり出来てゐる。誠に氣宇の廣大な文字たることがわかる。見るからに、如何にも大陸的な趣きを見せてゐるやうである。六朝の終り頃には、王羲之の美事な書も出た。その後、隋から唐代にかけては、有名な墨跡が出て智永だとか、歐陽詢だとか、相當後世にも傳はつてゐるものを出した。六朝時代には、西方の敦煌石室から出た經卷がある。それから漢の木札が中央亞細亞の沙漠の中から發見された。これ等出土品の墨跡から見ると、いづれも相當たつぷりした毛筆を用ひて、ゆつくりと墨書せられてゐたことが明瞭にわかる。別けても西亞細亞の沙漠から出た漢の王莽の神雀年間の木札を見ると、隸書のゆつたりした書體が鮮かに窺はるゝ。この書體から見ると、ふつくりとふくれた毛筆の穂が波みとられ、その毛筆の

恰好までが、如何にも首肯せらるゝのである。

古代の記録木札に現はれてゐる書體を見ると、上古の小刀時代は別として、その後、ゆたかな毛筆の使用されてゐたことは歴然としてゐる。その物が元來毛のことであるから、腐つて亡くなり、今日その名残りが傳はつて居らぬといふだけのことである。

日本の正倉院には、弘法大師の持つて歸つた筆の毛が遺つてゐる。それが僅かに古代の筆毛の失はれずに、形を見せてゐる唯一のものだと云へる。

支那の筆の歴史は、大體上古以來の處を考へると、上述のやうに見られる。だが、同じく古い歴史を有する西洋の文化史に在りてはギリシヤ、或はエジプトに於ては毛筆の使用は見られない。池や、泥沼に生えてゐる芦の莖であるとか、又これに類する禾本科の植物であるとかいふものの莖を削り、今日のペンの形に作り用ひてゐた。又その頃の紙といふパピラスと云つて、植物の葉っぱが用ひられてゐた。パピラスから今日のペーパーといふ語が生れたと云はれてゐる。して見ると、紙にしても、筆にしても、西洋ものは、東洋のそれと著しく違つてゐる。

なほアツシリア、バビロン、更に古くはスメル、アカツドの方では四角の箸の如き棒切れを使ひ、土を生ま乾かしたものの面に向つて、引搔くやうに傷をつけ書いてゐた。これは後の楔

形文字といふものである。この文具は又エジプトや希臘のものから違ひ又、支那のものからは丸きり變つてゐるものであるとされるのである。

かやうにして古代文化と民族の歴史を回顧して見ると、支那の筆の沿革は、同じ上代史上の筆とは云へ、一種獨特の存在とその發達を有してゐたものであることが分るのである。

二筆の種類

筆は種類別に見ると、大筆があり、小筆があり、水筆があり、壺筆がある。またその中間の形にいろいろ程度の違つたものあるは云ふまでもない。詩經の中に「彤管」といふ言葉が見えてゐる。飾りのついた管のことである。これが裝飾のある筆といふ意味でもあるか否か、定められぬ。けれどもこれもこゝに考へられる一つの手掛りとなる。なほ筆は軸の區別から見ると竹管があり、象牙の軸があり、又玉管の軸がある。竹管のうちには篠竹の細手のものがあり、成は斑竹と云つて茶褐色の斑の點々とあるものもある。また羅漢竹と云つて節の高く飛び出てゐるのを軸としたものもある。種々様々なのである。が、しかし大體支那は河北、山海關方面を境界としてあの邊から滿洲路に這入ると、パツタリ竹藪を見ず、竹は生えてゐないのである。中南部の

支那には竹が多いが、北支となると筍ですら見ない。これは地味氣候風土の關係からで、植物の分布上止むを得ぬ事である。が、今日北方の家庭に筆の見らるゝと云ふのは、皆南方から、或は日本から輸入してゐる輸入品なのである。清朝時代、木を削り箸のやうな軸を作り、穂を挿入する處のみ凹く仕上げられてゐたものがある。今もその名残りを時折り見ることがあるが、それは北支獨特の面目を物語る貴重な筆だと云へる。由來北支は独自の立場から北支向きの筆をつくらうとする。しかし南方の竹の軸に及ばぬ。それで一度竹管の氣に入つたものを手に入るゝと軸に穂の挿し替へをしたりしてこれを用ひる。なほこの筆管には漆で軸を塗り飾り、或は青貝の螺鈿で美しく、飾つて見たり、また管軸の末端を寶石や孔雀石で以つて埋め之に房を付けたリ、など相當贅澤なものも出來てゐた。また朱軸の乾漆の物があり、又その乾漆に細かい彫刻の施されたものなどもある。文具のこととしてその藝術的な氣持を加味したものは、實に豫想外の凝り方をしてゐたものである。これ等は王公貴族のうちの寶物などを見ると散見するのでよく分る。日本にも古くから寶筆の相當なものがあちこちに渡來してゐたやうである。

なほさういつた古筆の形式は、由來日本に於てもかなりのものを發達させてゐる。殊に桃山時代から江戸時代にかけて見らるゝ飾り筆はいかゞ。しかも由緒のある筆管を見ると、大體支那か

らのものが多い。或はこは手本として之を模して作つたものでないかと思はるゝ。さは云へ永年の間に日本獨特の味ひのする穂がある。使つて見るとコツが違ふ。細かく云ふて來ると、支那筆と日本筆とは用ひる上に、どことなく使ひ勝手が劃然と區別される。畫仙紙に試むるにしても又詩箋に試むるにしてもさうである。こは双方をつかひこなしてゐるものよく口にする處である。滿洲支那の間のもは何んとなく同じ感じのするものである。

日本筆に手馴れてゐるものは、支那筆を使ふと勝手がちがふと云ふ。又支那筆に馴れてゐるものは、日本筆が使ひにくいといふ。それぞれ、特徴があるからである。日本では尙大阪で發明されたとかいふのであるが、細い篠竹を二重、三重に重ねて、その先に細目な穂先をつけたものがある。こは水筆といふ名前で廣められてゐる。眞書き筆として細楷を書くに適當してゐるものである。が、珍らしく穂の先のところを固く絲で縛り軸の中を通してゐる。こは穂先の弛んだり抜けたりしないやうに引張つてゐる處に面白みがある。かういふ珍らしい仕掛けの筆は支那には見たことがない。

支那の方にあつて日本にあまり見ないのは、雀頭の筆である。これは橋の欄干に見る擬寶珠のやうな式に雀の頭の形をしたまん丸こい短鋒の筆である。その穂先は團栗の形にも似てゐる。昔經文を書く時分に用ひられたもの。六朝隋唐から、日本では弘法大師の頃から用ひられてゐる。この筆を使ふと獨特の書體が書ける。寫經に見る一種莊重な體は一つはこの雀頭の筆のせむであると云へるであらう。

次に穂先の毛の方面から筆の種類別けをして見ると、(一)狸毛があり、(二)狼毫があり、(三)羊毛があり、(四)紫毛があり、(五)兔毛があり、又(六)馬毛(雨尾)があり、(七)貂毛がある。その他、箒草で作つた(八)草筆もある。日本では九州博多香椎の海岸から採れる(九)水莖の筆などいふものもある。水莖は海岸浪打際に自然に咲く草の長い莖と毛根とを利用して筆にしたものである。(河原田平助翁の之をひろめてゐるものがありて普く知られてゐる。)

筆の穂はなほ細かく見て來ると、その毛の穂先に用ひられてゐるその毛の種類と、分量の割合である。その毛脚の腰の強い弱いにより配合を違へ、いろいろと分けらるゝことが考へらるゝ。例へば羊毛ばかりで拵へた筆は之を純羊毛筆といふ。これにいくらか紫毛を加へたものは、紫毛と羊毛のとり入れられた割合により、例へば七紫三羊といふやうな云ひ方をする。また純紫と云つて、羊の毛を少しも混ぜないものがある。或は又五紫五羊とか、三紫七羊とか云ふものもある。その數字により、その割合が一般にわかる事になつてゐるのである。

支那で『紫毫』といふのは、恐らく狸か羊くらゐの小動物であらうと思はるゝが、その實物に接したことはまだない。またその紫毫の毛皮に接したこともないのであるが、黒味のある毛根を有し、毛脚は一寸から一寸四五分位の長さを有してゐる。日本の平安堂主にも或はと思つて尋ねて見たが、どうもまだその姿に接したことがないとの事である。動物學者なり、動物園の係の玄人筋にでも訊ねて見たらと思つてゐる。無論支那のそれ／＼筆で商ひをしてゐる連中にしても、唯その持ち込まれた紫毫毛を商品として見せられてゐるだけのことである。本當に山奥の林中に行つて見なければ、如何なる姿をした動物であるかそこを確めることは出來ないのである。

また特殊な變つた筆としては、焼物に持つて行つて繪や字を書くときの極めて細長い穂先の筆がある。これは鼠の髭を併せて作らるゝとか、猫の毛を併せて作るのだとか色々ことが云はれてゐる。或は又米一粒に持つて行つて南無阿彌陀佛の六字を入れるとか、どうか、いろいろ風の變つた特殊な場合の用筆もあるのである。さういふ時の筆は話として面白くはあるが、そのことはこゝには述べないでおく。

支那で最極上の佳筆は、之を貢筆と云はれてゐる。こは貢品として筆匠の目錄中にも第一位に算へられてゐる。その値段も安くはないが、またその製法もよく吟味されてゐる。従つて名稱の付

け方も相當長い言葉で莊重に云ひ現はされてゐる。これ等極上の貢筆であると、冬毛が使はれてゐるにきまつてゐる。例へば羊毛が使はれてゐる場合には夏季に取つた羊毛は悪るくなり易いとされる。眞冬と云つて、嚴寒に取つた羊毛でなければよくないと云はれ、眞冬純羊毫の名がある。玄人筋の専門家の目で見ればそれは直ぐ分るのであらう。羊でも狸でもその體力は雪の間が盛である。従つて嚴冬の毛は腰が強いとされてゐるのである。嚴寒に於ける羊の毛脚は相當強くなつてゐるが、それが夏になると、弱はり、秋になると抜け代つてしまふのである。つまり冬のが一番丈夫で強いとされてゐる。

支那で純紫毛と云ふのは、楷書を書く時に用ひられてゐる。そは腰が強く出來てゐるからである。けれども、腰が強いばかりでは人によつては好まれない。やはりそこに軟か味を帯びさせなければならぬ。その時には、七分三分で七紫三羊といふやうに作る。若し半半といふのがよろしくば五紫五羊、うんと軟か味のあるのであると三紫七羊といふやうに作る。かやうな譯である。これ等は長鋒短鋒の長さ次第によるものであるが、又腰の強を加減することが大事なことになる。なほその邊の詳細の事を知らんとするものは湖州の筆匠の店から出てゐる各筆目錄によると、筆の種類が一層細かく諒解せられることと思ふ。

三筆匠

支那の本場の筆匠で有名な店の名前は既にも紹介しておいた通り、王一品とか老文元とか李鼎和とかいふのが澤山ある。湖州のも杭州のも同じやうに信用のある老舗であるが、その大きい筆匠は、支店を上海や北京あたりにまでも出してゐる。事變前にはまたその工場を出してゐるものもあつた。なほその店には筆ばかりでなく、墨や、硯をも一と通り列べてゐたものもある。

支那の筆匠がその老舗の名譽の爲めに、一番苦心してゐるのは、云ふまでもなく筆の穂先の鑑製である。それは筆毛の割合の配合により、また毛の撰定により、また長鋒短雅の如何により、筆の特徴が現はれて来る。支那の筆匠の作る筆に壺筆といふがある。普通の竹の軸のほかにいろいろ變つたものの作られることは云ふを俟たぬが、壺筆と云ふのは日本人に餘りさう知られてゐない。時折り雅人の書齋で見ることがあるのだが、こは竹軸の筆と全然姿を異にしてゐる。その軸が壺形をなしてゐる處から、命名されたものである。若し軸を逆しまに机の上に立てるならば、直角にちゃんと立つ。見るからに、如何にも雅味のある筆であつて、畫仙の全紙に一字大きく揮毫でもしよやうといふやうな場合に用ひらるゝのは、この壺筆なのである。自分達も支那にゐる

時分には、之を用ひて墨戯に耽ることがあつた。が軸の短かくて持ち易いところに、卻つて面白味がある。壺筆の穂先は腰の強くして篆書など試むる上には都合がよろしいやうである。

壺筆は文字の遺入つた軸を見ない。が、壺筆に似た鈍豆形をした風流な筆には往々刻字を見る。その軸には穂先の付根に近い處に象牙の飾りのついてゐるのがあつたりするので、上品なのが多い。軸はその墨で穢れるのを防ぐのが肝腎でそのため象牙が用ひられてゐるのであらう。

次には一般に見る管軸の刻字のことである。が、筆匠として、店の筆管にそれぞれ刻み込む文字の事については、相當苦心されてゐるやうに察せらるゝ。その軸に入るゝ刻字の姿は、すつきりした清香な文字が選ばれてゐる。筆工の刻してゐる様子を工場で見ると面白い。その筆の軸に視線を注いでやつてゐるのか、ゐないのか判らぬ。丸で他所見しながら手先の勘で以つて刀子を弄してゐる。コツで彫つてゐるとしか見えぬ。時には、何だか、鼻唄など歌ひながら刀を使つてゐることもある。でも出來上る前に一二度フワフと粉を吹き飛ばすべく、一寸吹いたり手で撫でて見たりしてゐる。しかしその上がりを手にとつて見ると實によく出來てゐるのだ。その馴れ切つたコツと云ふものは全くたいした者だと云へる。動もすると、日本では筆そのものはよく出來て申分のないものがある。が、しかしその刻された文字が香ばしくないので、興の醒むるこ

とがある。これは畫龍點睛なのだから、大いに研究の餘地の残されてゐるものだと思ふ。尤も和筆にしたつて、一般に筆を用ひる人がそこまで氣を揉まないとすれば、餘計な氣配りかとも云へる。筆匠そのものよりか、要はこの筆に對する使用者一般の精神がどの程度に進んでゐるかといふことで決まるべきものであると思ふ。

なほ唐筆はその管軸に施さるゝ刻字の風雅であるといふことばかりでなく、冬筆の名稱そのものに又文學的な凝つたものが多い。こゝに紹介しておきたい筆の名稱は、浙江省湖州筆匠胡文瑞の目錄である。そのまゝこゝに添へておく。

、 浙湖胡文瑞名筆單仿

と云へる題の下に費蓮青と云ふ朱肉の印を捺し胡文瑞主人謹識とあるのである。勿論廣告用の目錄の事として、本齋には冬毫雅管を選置してあるとか、各種純毫、湖潁水筆、徽墨端歛各硯、四達馳名とかなり大きく出てゐる。凡そ仕宦紳商、貴客賜顧、清認本齋招牌、庶不致誤。爰將筆目開列於左。と云ふ書き出しで以つて羊毫紫毫の部類別けをして次の如く列記してゐるのである。尙その各筆の下に角とあるは、大分前の相場であるが日本の十錢に大體あたると見てよい。

羊 毫

貢品眞冬宿淨純羊毫	六角	小楷純羊毫	一角一分六
貢品長潁眞冬淨純宿羊毫	五角	淨羊毫	八分六厘
極品加料淨純宿羊毫	四角	珠圓玉潤	一角一分六
極品雙料淨純羊毫	三角四分六	純羊毫書畫筆	一角六分八
極品小楷淨純宿羊毫	三角二分	鷺	四分九厘
極品雙料純羊毫	三角二分	純羊毫	三分六厘
極品淨純羊毫小楷	二角三分		
極品淨純羊毫	二角三分	紫 毫	
御賜清愛堂	二角三分	貢品正冬淨純紫毫大卷筆	八角六分
裏料淨純羊毫	二角三分	極品眞冬淨純紫毫策筆	六角四分
非秋垂露	一角七分二	極品三料淨純冬紫毫	五角二分
淨純羊毫	一角二分	極品雙料淨純冬紫毫	四角
		龍跳天門入紫微	六角
		字外出力中藏稜	三角三分六

筆について

極品雙料純紫毫摺筆	四角	上京水	六分四厘
極品雙料純紫毫	三角三分六	大京水	五分八厘
極品摺筆	二角四分	京水	四分三厘
御賜天香深霈	二角四分	通開	二分八厘
極品純紫毫	二角三分	金不換	二分二厘
寫摺	一角三分五		
天香深霈	一角一分六	紫羊毫	
吟到梅花句亦香	一角一分六	極品加料七紫三羊毫	四角
宜書宜畫	一角一分六	極品雙料純紫羊毫	三角
極品淨純狼毫	三角	極品純紫兼毫	二角三分七
烏龍水筆	一角二分八	極品紫三羊毫	三角
通開水毫	一角四分	極品五紫五羊毫	三角
紫狼京水	一角二分	極品加料三紫七羊毫	四角
仿古京庄	壹角	金鑾左右振奇才	三角

極品三紫七羊小楷	三角	精妙入神	八分六厘
極品五紫五羊	二角三分	飛花入硯池	八分六厘
上純紫兼毫	二角二分	日近天顏	七分
揮毫落紙如雲烟	二角二分	紫兼毫	八分六厘
極品七紫三羊	二角二分	春風馬上篇	八分六厘
春光醉目前	一角四分	中書君	七分
七紫三毫	一角一分六厘	玉映冰壺	七分二厘
詞林妙品	一角三分五厘	清言見古令	五分二厘
紫狼兼毫	一角一分六厘	小楷兼毫	七分二厘
白鳳吐文章	一角三分五厘	晉唐小楷	四分三厘
果然奪得錦標歸	一角二分	得心應手	四分三厘
指揮如意	一角一分六厘	用久方知	四分三厘
五紫五羊	一角四分	雲中白鶴	四分
三紫七羊	一角一分六厘	小大由之	四分

青雲得路	三分	極品長鋒淨純毫此小楷	四角
羊兼毫	二分四厘	極品純毛毫	一角六分
上耐久	一分八厘	上純毛毫	七分
小羊毫	二分	圓健	一角四分
胡文瑞精製	七分	極品重料淨北狼毫	五角
胡文瑞選	七分三厘	極品淨純北狼毫小楷	二角五分
大綠穎	六分六厘	京庄水筆	八分六厘
		小綠穎	五分
		蓮記精製	七分二厘
書成換白鵝	五角		

新 増

尙この見出しの上に持つて行つて、朱印で以つて街名を示した所の彩鳳坊と云ふ風雅な巻物なりの關防とそかれら商賣上の判子、貨眞價實、加工精選と云ふ八文字の長方形を捺印してゐる。なほ曰く茲には品目の大體をお目につけたので、注文に應じ各様の筆を、又筆管に刻する詩文顯名などいくらでも需めに應ずる旨の事が主人費蓮青翁の名で終りに書き誌るされてある。自分が

先年湖州に遊び、王一品とか胡文瑞とか云ふ筆匠を歴訪したことがあるので隨時その目錄や筆を贈つて呉れることがあるのである。

四 筆の扱ひ方

筆の扱ひ方について、少しく述べておく。支那の人は筆を大事にするところから家庭卓上に筆架筆帽を備へてゐる。筆帽は使用した後で穂を挿入するためのもので、つまり筆帽には筆の穂の藏まる處に特に潤ひを與へ、乾燥しないやう工夫されてあるわけである。その尖端が常に潤ひを帯びてゐるといふとは、いつ何時筆を執り紙に向ふといふときでも氣持のよいものである。筆を扱ふ人は、必ず使つた後、水で洗ふべく氣にしてゐる人もある。が、筆帽にいつも藏めておくなら、之を洗ふの必要はない。重い大筆で大字を書き終つた後、洗つてしまふがよいといふものもある。が、これは卻つて風をすかせるために、永い間には毛が持てず弱つて来る。そのために虫にやられる。むしろ出来ることならば膠を含める墨のくつ付いたまゝで藏めておくことだ。次に使用する時の來たとき、磨つた墨の中へ浸しおくと自然に和かくなる。この方法だと、物の十分も経たないうちに、ふうわり軟かくなる。それで再び結構使用に堪へるのである。また事實その

墨のついた儘おいておくと、墨の中に含まれてゐる防虫剤の爲め虫が之を嫌ふと見えて害をせぬ。その方が筆は安全であると考へられてゐる。

支那筆に限らず、日本の筆にしてもさうであるが、書を認める時、その紙の墨付き工合は多少裏に滲み出る位がよい。紙に滲透性を持つてゐるのは自然の現はれが見られてよい。若し洋紙の如く、何等滲み出すことのないピンピンした紙は書きながら潤ひを感じず、面白味が出ない。自然にふつくりと滲み出すことによつて黒書に對する演筆遲速の面白味がそこに現はるのである。そこに興味が湧くといふことは書道にとつて大事なことだ。ゆつくり書いておればにじみ出る。速く運べば、かすれが出る。そこだ。かういふ種類の變化が紙面の上にいる色と出る。雲龍の自然の働きが表現されて來ると見らるゝのもこゝを指したものである。

總じて筆の穂のことを六釜しく云ふのもよい。しかし之と同時に、紙質のことについても關聯して考へなくてはならぬ。近東資材不足の世の中で、紙の事を云々出來ないのは當然であるが、そのうちでも商工省の肝煎りで以つて國策會社のささやかのが成立し、その力で中部支那の現地から畫仙紙が直接來ることになつた。いくらかそれでその邊の氣持が補はれるかも知れぬ。

筆の直し修繕のことである。が、日本には筆の直しとか、足し毛をする爲め筆屋を煩はすとか

いふ話を聞いたことがない。處が支那ではそれを見る。永年取つてゐる自分の筆は手に馴れた軸である。これ棄てる氣にならない。いくらいたんでもせめて穂先を直したらと思ふのみである。悪くなれば、穂先に足し毛をすればよい。そは何處までもその筆を永く使用したい手離したくない爲である。筆管は手の延長とも見らるべく之を棄てたくないのは人情である。一方には又勿體ないからどこまでも之を使ふといふ氣持もある。さういつた重々しい氣持の伴つてゐることは支那文房具として床しく感ぜらるゝ處だ。

又揮毫に當つて支那の人は筆の扱ひ方その書き振りに都合のよろしいやうな恰好に作らせることがある。その目的次第に叶ふ筆が撰ばれてゐるやうである。つまりめいめいその馴れた筆匠に自分のものを作らせるといふ風にする。よい事である。篆書をかくものは命毛の著しくないのを注文すると云つた風である。湖州なら湖州に自分の勝手のきける店をきめておき嗜好に適つた筆をそこで作らせる。人情さうあるべきである。

全體として見るときは、支那の人は羊毛の長鋒が好まれるやうである。これは支那の人々のあのふうわりとした氣持をその儘反映してゐると云へる。使つて見るとわかるが、あの腰のない、ふわふわした羊毛の長鋒を扱ひこなすと云ふことは、殊に墨を吸取る力の激しい支那の畫仙紙に

對してやりにくい事である。慣れぬものは、とても頼りなくて仕方がないと云ふ。どうしても羊毛の長いのを使ひこなすとするならば、もつと腰の強い毛を何割かたしてしつかりしたものになければいかぬ、かやう云ふに日本人もある。然し支那の人は慣れたものだ。あの頼りない羊毛の筆をかるく扱ひながら、ふわりとらくに紙面をこなしてまわり巧みに變化を作つてゆく。書きながらそこに一種の妙味を感じてゐる譯である。こは一に支那の民族性から出た心構への反映であるとも云ひ得べく、ふうわりと行つて、粘り強く而もそこに角立たない運筆法をとる。その邊の墨場氣分の特徴が長飾鋒の羊毛の筆にちゃんと現はれてゐる。自分は支那の人々の筆の扱ひ振りを見てかやうに解釋してゐるのである。

要するに支那の人々の用ひてゐる筆は、總體に長鋒のものが多く且つ腰の弱いのが普通である。弱くはあるけれども、その間に粘りがありその爲めに強い充實した線の引き方が閃めく。それは支那の文人學者とが、出來上つた人の風格のある。筆跡とかを見るとはつきりわかる。味へば味ふほど、そこに深い氣持が悟られるのである。

支那の人の筆の持ち方は、之を日本人の持ち方に比べると稍や違ふ。あちらの人は右手の手頸を直角にして二本の指を引かけ双鉤でゆく。これが多い。従つて出來上つた書風が幾分日本人の

それと違つて重々しい。日本人の書は筆の持ち方も輕快である。書の出來榮えも涼しさを見せてゐる。大陸の人の書は、その筆力が露骨に出てない。そこには書き振りの違ふ點も無論あるのだけれども、それよりも更に書に對するもつと大きな、説明の出來にくい何か違つた幽玄なものを持つてゐるやうに見える。それはつまり「軟かくて強い」といふか「強く充實してゐて而かも柔かい」と云ふか。この一言で先づ支那の人の書を總括し得ることが出来る。

要するに書の方の事はともかくとして、日本の筆も支那の筆も形式工作の根本のところは違つてゐない。でも自分で浙江の筆鋪工場に行き親しくその工人の作り方を見てゐると妙なことを見せつけらるゝ。それは折角軸に挿し込んだ穂先を手の掌におき、パタパタと叩きくだけ、その筆毛の芯を逐一殺してしまふやうなどをしてゐる。そしてあとで之を指で摘み揃へてゐる。揃へては叩き、叩いては揃へてゐる。かやうにして、それを何回と繰返へした揚句ちやんと長鋒に纏め上げる。かういつたことを自分の見たまゝ、日本の筆匠に詳しく話した。處が暫くして合點して、自分にいふやう『それはなるほど、これあるかなだ。毛がどの方向にでも名筆として向けられるためには、充分徹底的に毛を叩きつけ殺してしまつておくべきだ。それはよろしい事である』云々。かやうな批評をしてゐた。この點よくわからぬが、廣く日本の筆匠について自分は意見を質して

みたいと思つてゐる。

なほ最後に、日本の筆も近來はよく支那の筆同様に交際場裡に利用され、贈答に使はれてゐる。支那では筆の贈物と云ふと、とても美しい金欄ガラス張りの函が用ひられ、金色燦爛たる光彩を示してゐるものがある。見るからにこは如何にも支那らしいものである。日本の筆の贈物を見るときに比較すると大分開きがあるやうに思はるゝ。

二 毛筆の愛玩

一 日支毛筆の相違

毛筆と云へば書道を連想し墨場のことが思ひ出される。ところで同じ毛筆と云つても支那製のものと日本製のものが使はれてゐる。弘法大師は狸毫筆の製法を支那で研究せられ唐代には狸毫筆の流行してゐたことが想像せらるゝが何と云つても筆は支那が本場であり、支那筆を手本とすべきもののやうに考へられる。ところが近來支那の畫人あたりは細筆は支那の方がよろしいが大筆は日本出來の方が優つてゐると云つて、支那からわざ／＼日本に注文して來てゐると云ふ逆の状態を見るに至つたこと上にも云つた通りで、こは面白い現象だと云ふべきである。

俗に弘法は筆を選ばずなど、云はれてゐる。が、弘法は筆のことを相當八益しく云つてゐた。大師の如く書道に於いても唐人の書と云つて差支のない位の處にゐた能筆からするには支那流の製法でなくては氣持に添はなかつたものであらう。現に今日でも妙なもので、支那出來の毛筆を

使用してゐるといふとおのづから支那風の書が出来る。支那の人の書くときの様子その他支那の文房具一切の事を思ひ出して書くせぬか、そこには必ず支那式の氣分が漾ふのである。それが自然と筆にも出るものと見える。近來のやうに何もかも日本精神で燃えてゐなくてはならぬやうな時代には支那筆謳歌など香ばしくもないかも知れぬ。けれども久しきに亙り支那の筆が手に慣れて來ると支那筆を手離すわけにいかなくなる。又一般の日本人が歐陽詢を臨したり王羲之を臨したりする場合にもしも支那筆を用ひるならばそこに一段とやり易いところがあるであらうと察せられる。しかし腰の強い日本筆を使ひ慣れて來たものは支那の筆は使ひ心地が悪い。腰がなくてたよりないのと云つてゐる或はさうであるかも知れぬ。

書道に關する限り書風は支那流であることをとやかく云ふべき段でない。又とやかく云ふべき筋合のものでもない。従つて支那筆を以つて書きたい者は支那筆で行つてよいと思ふ。書道は日滿支三國共通にして國境などない筈のものである。出來れば正月の書初めなどは日滿支三國がお互に學童同志交換しあつてもよろしい位に考へてゐる。毛筆に親しむと云ふ美風からするならば他の政治經濟を離れて全くの趣味の問題翰墨文化の國交として大いに奨勵されてよろしい事だと思ふ。毛筆による國際間の親交はどれだけ厚く行はれてもよろしい。その點で支那には隨分手本と

するに足るべきものが多い。そのとき支那の人々の用ひる筆は支那筆であること勿論なるも更にその書く人の氣分、傳統的の趣味、又その環境と云ふものがすべて支那流に出來てゐるわけなのだ。そこに日本流と云つたものは少しも認められてゐないのである。日本人はよく例の芝居の三くだり半式の事を平氣で立つてゐて走り書きするが、かゝる習慣は支那には見ない。又之を支那の人が見せつけらるゝと實に不思議だと云つて驚くくらゐである。かやうにして支那の方から日本流を採入れると云ふ氣分は殆んどないのである。

ところが日本の方はどうかと云ふと本場の支那から採入りたいものだらけである。

金石拓本尺牘から硯、筆紙墨、印材印泥、文鎮と云つたものを始めとして支那翰墨氣分そのものまでをも採入りたいと思つてゐるものがどつさりある。せめて支那へ翰墨行脚でもしてあちらの旅行氣分を味つて見たいと云ふものがどの位あるか判らぬ。唯連れて行つてくれる者がないの考へてゐるのぢやと云ふ熱心家さへ相當あるらしい。又自分はそれについての話を持ちかけらるゝ事が一再ならずあるのだ。

支那毛筆の愛玩を立前として同好者と語りあふとするならばそこに盡きぬ興味が湧く。又こればかりはいくら言語の通ぜぬ廣東人がゐようと福建の田舎の人がゐようと構はぬ。大體は毛筆を

媒介として理解しあふことが出来るのである。たゞこゝに注意すべきは毛筆に對する眞のなじみ方の程度如何の問題である。日本の人は眞に心から書道になじみ毛筆を愛玩するまでに行つてゐるかどうか。之を支那社會なり家庭なりの實際を見てゐる自分どもから云ふとそこに大きい開があるやうに感ぜられる。いくら書道が日本に流行してゐるとは云つても日本の方は將來永い先きはともかくも、今の處ではまだ毛筆であるがそれにしても、本當に生活とピッタリ來てゐない。今の生活はちぐはぐの事のみ多くてしつくり來てゐない。この點は色々の方面から感ぜられるのである。

二 筆書の重厚性

支那にあつては固より目に一丁字のない人が多く、毛筆を手にした事のない人は相當にある。けれどもその家庭々々の實際を見て來ると卓上の一隅に古ぼけた硯面の一つくらゐはおかれ、之に水滴だの墨だの毛筆だのが配せられてゐる。時には眞鍮の墨池に筆帽、筆架の配せられてあることもある。若し來客でもあつて、茶を請するときには傍に、墨池なり筆硯なりを挾んで坐するが普通である。話の佳境に入るも入らぬも、それには關係なくそのうちの一人必ず毛筆を手にして

何事をか書きなぐつてゐる。別に意味はなくとも何か毛筆を弄んでゝもゐないと淋しさを感じるらしい。これは手持ち無沙汰をまぎらかせる爲めの氣持もあるのだ。先づそこは玉を弄するの氣持で筆管を愛玩してゐると見ればよい。

管城おのづから豊年あり

と古人も云つてゐるくらゐだから筆になじみ之を愛玩するなどはよい事である。さうした風懷は南北各地方何れの處に行つても見出される。察するにこは恐らく千年や二千年くらゐの習慣ではあるまい。もつと古くからあつた風習であつたであらう。周代にも禮、樂、射、御、書、數と六藝のうちに之を數へ入れてゐるくらゐだから相當民族的には深い根を有してゐると察せらるゝ。歴史の上ではたしかに毛筆は秦の蒙恬が發明したのだと云はれてゐる。がそれはそれとして、あの先秦時代一々さうその蝌蚪の文字や漆書の書きづらい文字をあつたであらう。上にも云つた漢の王莽の神雀年間頃行はれてゐた木簡文字を見てもかなり漢隸以外の實用文字が行はれ沙漠の中から當時の書體を見るに足るべき材料が出土してゐる。恐らく何れの時代も實用に役立つ文字が受け易い形をとつて書かれてゐた事と思はれる。して見ると相當古い時代から之を書く筆（必ずしも筆のみと

は云はぬ、刀もあつたかも知れぬ）が出来てゐたものであらう。刀筆の吏と云へる語の出来てゐるのでもわかるやうに、これによつて一般家庭に古は刀や筆の這入つてゐたことが判るのである。これほど愛用せられてゐる筆を使つてゐてもいざ文字を書くとき云ふ段になるとあちらの人は驚くほど謹直な態度をとる。一點一畫を苟くもしないやうな氣持で以つて臨む。恐ろしく敬虔の念に溢れて書いてゐるのではないかと思はれる位に眞面目に書いてゐる。これは幼少の頃から寺子屋で又家庭で眞剣に習ひ込ませてあるのだから、その習慣で謹直な文字が書かれる。例へば料理屋や古玩店あたりで番頭が一枚の受取證を書くにしてもそのときの様子を見てると判る。又その出来栄えはに相當、見事である。さすがに支那は書の國であるわいと歎美せらるゝ位である。固より中には随分ひどいものもある。ひどいのがあつても人の前でその毛筆がとれるくらゐのものならばちゃんとした處が書ける。

貧家にあつてその見るからに米鹽の資にも窮するかに見えてゐるうちでも主人公がその毛筆を手にして紙に墨書してゐるところでも見ると、その書の美しさにびつくりさせられる事がある。寺子屋兒童の淨書の立派なこと又三民主義の標語の文字の見事なこと、云つたらこは全く一般廣告文字の見事なものと併せ見るべきものである。その書風の堂々としてゐる重も／＼しさは全く敬

服に價する。その文字が如何にも楽しんで書かれたものであることが判る。あちらでは生活と文字とがピッタリ合つてゐるところに文字の生命がある。そこに迫力があり、魅力があるのである。而かもどことなく犯しがたい氣品の溢れてゐるところもある。これはこゝにことごとく改めて云はずとも大抵判つてゐることである。即ち

- 一 書幅扁額の文字
- 二 畫讚に見る文字
- 三 牌樓對聯に見る文字
- 四 門標、堂號、廡號、招牌に見る文字
- 五 硯銘、書鎮、筆管、寶墨に見る文字
- 六 包裝紙に見る文字
- 七 竹器象眼鑄金ものに見る文字
- 八 書簡詩箋に見る文字
- 九 題簽に見る文字

支那讀書人の毛筆を愛玩するときの氣分は誠に重厚典雅なところがある。その執筆のときの氣

分態度も單にその文字を書き記すと云ふだけでなくどこまでも其の書の體を備へたところを完全に現はしその名が後世に残ることを一々考慮に入れてやつてゐるかの如くに見られる。たしかに各人にその自覺が潜在してゐることだらうと察せられる。と云ふのは假令その座談筆談のときのやうな無雜作に唯だ判ればよい程度のもを書くに當つても矢張り本腰を入れ端坐して毛筆を改めて執ると云つた態度が見える。その文字を書くときの心掛けのいかに眞摯であるかは察するに餘りあることだと云ふべきである。

日本人のかく書は輕快なところが主となりスピード的であるのが多い。判ればよいと云つた書き振りなのである。ところが支那の人の筆蹟は見るからに重厚である。敦厚そのものゝやうな書が多い。寫經を見ても碑文を見ても又四庫全書あたりの細楷を見てもそれである。勿論日本人の中にだつて時にはそれに負けぬ立派な出來榮えのするものもある。たしかにあるのであるから必ずしも支那ばかりを禮讚するにも及ばぬ。空海でも支那に持つて行けば相當な位置に据ゑられると云つた工合に日本のもの必ずしも劣つてゐるとはきまらぬ。けれどもしかし全體から見ると支那の書はいくら幾千幾萬書かうがそこに一寸も狂ひが生じない。きちんと判で捺したやうに揃つた文字が出来る。人間の手で毛筆を持つて書く字にどうしてあの通り型の如くきちんと書けるので

あるか不思議でならぬのである。思ふにこれは單に毛筆を愛玩してゐるとか、書が好きであるからとか云ふ位の理由で出来るのではない。恐らく更にもつともつと、深い書道の歴史的因縁がその背景に潜在してゐるのでないかと考へられる。

三 なじめる書風

支那の人々の書に就いてその日常生活に織り込まれてゐる處を見ると、日本あたりに見るものと異なる處がある。例へばその筆匠が筆の軸に刻み込んでゐる筆名の書體を見てもそれが一見して筆管向きの書體なることが判る。日本の筆管にはどうしても納まりの悪い書が刻されてゐるゆゑ支那筆を見てゐる目からすると物足りないこと夥しい。

支那筆には毛筆に見る刻字のいかにも清楚なところがある。その純羊毫であらうと狼毫であらうと又紫毫であらうとその毛の種類に關係なく竹管に入れられてゐる書體はさつぱりした竹管文字である。自分は永年この點に氣に掛かる處があり、あちらの筆匠を何とか日本に招來して日本の筆の方にもかゝる清楚なよい文字を入れさせるやうにしたらと考へてゐた。けれども未だその機が熟せず、そのまゝになり、支那管に比べて、開きのある文字が日本の筆に入れられてゐる

のである。筆管文字は使用者の方でも之をなつかしみ上にも云つたやうにその自ら使用してゐる筆がかりに禿筆となるとこれにたし毛などまでして之をなるべく棄てぬやうにしてゐる。筆の軸もこゝまで大切に愛用せらるゝと筆の心と自分とが合一状態になるわけだ。そこまで来ると濃やかなよろしい書もおのづから書けるわけである。筆を粗末にしたたり管軸にあこがれを有しないやうな者であるなら矢張りそれだけ氣持が添はぬことになる。心すべき事である。

又トイヅ（對子）などにしても支那ではリエン（聯）と云へばかなり之を家具として重く見る。重く見らるゝものであるから、それだけ之には謹直な文字が書かれてゐる。鄭板橋の聯のやうな時に無雜作に出來たものを見ることもあるがしかし聯の文字と云へば多くは丁寧に又莊重に書かれてゐる。何紹基にしる王夢樓（文治）にしる、伊墨卿にしる吳讓之にしる又鄧完白にしる金冬心にしるその邊の人の聯はよく見る處であるが、何れも皆な眞面目に書かれてゐる。趙之謙あたりのは殊にひろく好かれてゐる。恐らくこれらは聯として市價を高からしめてゐるものであるがその書の風格がいかにも聯向きに出來てゐる。毛筆を用ひる聯文をしあげると云ふときには特別の心使ひがあるのではないかと思はるゝくらゐちやんと整つてゐる。そこに聯としての落ち着きも現はるれば、風格韻致も味はれて来る。

支那町の城内をあるいてゐるとその市井に門間に又家庭内にとあらゆるところに聯が見出され、隨處に聯の文字の優美さを見これに魅せらるゝのである。支那では卷軸ものを見るよりか誰れ人の目にも普通にひろく映するものはこの聯である。聯句を味ひその書風を見てゐると立派に支那書道の大きな流れが感受せらるる。又毛筆がいかに莊重に運ばれてゐるかを思はしむるのである。

それから又各市井城内の寺廟に見る扁額であるが、これには扁額と聯とが互に交つて掲げられてゐる。そこに見る文字はこれ亦相當謹嚴莊重なものである。お寺なり祠堂なりに行つて見ると紅漆に金文字又黄金漆に金文字又は綠色とつた調子にそれ〴〵燦然たる肉太の文字が光つてゐる。これなどは固より物が物だけに相當費用のかかつた製作に成るものであつて、その毛筆の當り具合から運筆の優趣がそのまゝそつくり刻されてゐる。支那大衆の出入するところで祠堂寺觀くらゐかうした莊重な文字のあまた輝いてゐるところはない。東嶽廟にしる、城隍廟にしる、文昌廟にしる、又關帝廟にしるその一般から人氣の集まつてゐるところであればあるほどそこに扁額楹聯の寄進されたものが多いわけである。中には雨を祈る爲め又その念願の成就したる爲め龍王廟あたりの神前に「有求必應」の四文字の金字扁額が、澤山奉納せられてゐるのを見る。田舎の龍

王廟祠その他にはこの「有求必應」の墨書されたお粗末なものがどつさりある。田夫野人の書いたものらしい生硬な筆行きのものもある。必ずしも一定はしてゐないがそれにしても日本あたりの神社佛閣とは異なりその神殿佛前に手向けられた額や聯の多いことは豫想外のものである。

かやうな風俗を見る度毎にそこに立派な書道の應用せられたものが相當見せつけられる。かうした大衆の信仰心に結付けられた文字の威力と云ふものはたいしたものである。恐らくこはその地方々々の相當有名な能筆に頼んで揮毫してもらつたものを元として刻したものであらうが相當出色の出来栄えの文字を見る。これらは日本の展覽會あたりの書ばかり見てゐるものに、一度是非見ておいてもらひたいものである。

尙古いところの例をとつて考へて見るとこの外に漢代の瓦當文字であるとか、六朝時代の瓦甃の文字であるとか云ふものがある。これらは多く刷毛で以つて文字を表はしたものらしく、毛筆書きとしては受取れぬものである。それにしてもその場面々々に調和するやうに圖案化して出来てゐる。又鑄金ものでは佛像の向背の銘であるとか古いところでは又各種の銅器銘であるとか又は石刻碑碣の類であるとか云ふがある。これら金石ものはそれ／＼の特徴に似合はしく鑄銘にて又鑿銘にて又象眼にて入れられてゐたり又丹書と云つて朱書きをしてそのまゝ碑面に刻りつく

ると云ふやり方をしたのもある。何れにしてもその場面々々になじみ合ひ毛筆なり刀なりがよく嵌つてゐるところに文字のこなれ加減が味はれるのである。

古代の金石についてはその筆の使ひ方の藏鋒なるがあり、又露鋒なるがあり、一定はしてゐないがその筆を然るべくその物に應じ使ひこなして行く處は面白い。筆を愛し筆に親しみをもち筆の氣分そのものをすつかり打ち込んでゐるからそこにこれだけの筆致が現はれる。支那筆の愛玩もこゝに至つて極まれりと云ふべきである。

四 毛筆と佳句

人はいくら毛筆を愛しいくら文字に親しんでゐても、その書く句によい句を思ひ出さねば何にもならぬ。文字は一つには佳句を表現してゐなくては意味をなさない。千古の人をして仰望せしむるにはどうしても千載の後まで亡びざるの名言嘉句を示すのでなくては生命はない。例へば武廟あたりに行つて見ると實に快心の名句が見出されるがそれが筆太と／＼と墨色ゆたかに書かれ金文字で輝やかせてゐる。これを見ると何とも云へぬ崇高の念に打たれて来る。曰く、萬人の敵、千古の英とあつたり、一朝氣節を存し、千古須康を望むと云ふのがあつたり、又一代の精忠日月

にかゝり、千秋の正氣山河に壯なりなどあるのを讀む。

萬人之敵。

一朝存氣節

一代精忠懸日月

千古之英。

千古望須康。

千秋正氣壯山河。

また岳飛（武穆）の廟を訪ねて見るとこゝには又見事な文字を見る。忠は日月を貫き、氣は風雲を奮はすとか又青山恨みあり忠骨を埋め、白鐵辜なく佞臣を鑄るなど云ふのがある。

忠貫日月

青山有恨埋忠骨

氣奮風雲。

白鐵無辜鑄佞臣。

それから又城内有數の家廟を訪ねて行つて見ると、お定まりの句ではあるが次のやうながある。典祀千年に重く、綿延百世にさかなりとか、孝友は傳家の本、詩書は繼世の根とか、又祖澤百年禮樂をおもふ。家風十世箕裘ありとか。それから又秋霜春露先澤をおもひ、霞蔚雲蒸後人をひらくなんて云ふのもある。

典祀千年重

孝友傳家本

祖澤百年惟禮樂

秋霜春露懷先澤

綿延百世昌。

詩書繼世根。

家風十世有箕裘。

霞蔚雲蒸啓後人。

積徳百年興禮樂

讀書萬卷起經綸。

これらはホンの一例であるがかうした千古の重厚な氣分の漲れる佳句集句をゆたかな毛筆の運びも優しく悠々と書いてまゐるところは如何にもよい者である。古人の聯句に家醞瓶にみち、書は架にみち、詞源海の如く、筆、椽の如しと云ふのがある。

家醞滿瓶書滿架

詞源如海筆如椽。

實に椽大の筆を揮ひ百花爛漫の氣分で墨色鮮かに書いて行くのは謂はゞ得がたい長壽法とでも云へるやうな氣がする。墨色ゆたかな毛筆を用ひ壽にして而して康と云ふ氣持で而かも句意香ばしいものを書き列ねて行くと云ふことは翰墨の極致である。名は北斗に高く星辰の上、詩は千山に在り煙雨の中など云はるゝも全くこの境地に處して現はしたものと云はれる。矢張り支那の書は句意である。佳句祥瑞に充ちてゐる書であるならおのづから人を引つけ動かすだけの魅力をも持つ。そのいくら童子の拙い文字であつても、山靜かなること太古の如く、日は永きこと少年に似たりなど云はるゝと如何にもその雅意に心を動かされる。山靜如太古、日永似少年。誰れに

も知られてゐる句ではあるが味のある句として認められてゐる。何でもよろしい。その書以外の句意がいつでも相當人を動かすだけの句に成つてゐることが肝腎である。支那の人はそこになると又お手のものである。聯句や古人の集句だけにしても随分持ち合せがあり、又みづから急拵へに拵へてもよろしい。何にしても相當な文句になる。これが翰墨氣分と結付き毛筆の愛玩をして一段緊密ならしめて行く。この故に毛筆をとるものは風土風物、君子の道にいそしみその側の古人の章句なり又自作なりを常に表現し得るだけの教養を積んでおく事が大事である。やゝもすると書道はたゞ見て書くだけ、眞似をして臨書するだけのものだと言ふ風に考へられてゐる。頓でもない間違つた考である。かうした句意の内容を充實させて胸に萬年金石の譜を藏してゐるとのゆとりを持ち而る後に毛筆を執ると言ふ風にいたしたいものである。

實際の話をするに支那では詩文書畫を能くし得るものでなくては毛筆が自由に揮へない事になつてゐる。詩文書畫の外に尙篆刻だの印泥の練り方だの、色々心得てゐる人が少なくないのである。従つてその愛玩してゐる硯に自刻の銘を入れたり之を人へ進物にするとき刻銘を入れて贈つたりなどする。又書鎮（文鎮）などに贈るにしても四君子を刻したり、爲め書きを刻したりして贈る。相當みな氣のきいた事が出来てゐる。單に毛筆を愛玩するからとそれだけで能事了れ

りとするべきではない。その道に這入ると堂奥に入るまでには可成りその嗜みをして知つておかねばならぬ事がどつさりある。尙最後に付け加へておきたいのは日本人の毛筆の持ち方に就いて注意を喚起することこれである。と言ふのは支那の人の持ち方については上に云つたが、日本人はやゝもすると折角書道の流行で毛筆を手にする青年兒童の多く現はれたのは喜ばしい事であるが、しかし多くはその筆を持つのに、丸で鉛筆やペン萬年筆を握ると同じやうな要領で持つのである。これは何たる不心得なことであらう。勿論大筆の場合はさうでもないが、小筆の場合、つまり鉛筆やペンを執ると同じ大いさの筆をとる時にはツイ無意識にペンを握る握り方となつてしまふのである。そのどこまでも毛筆の時には紙面に對して直角に、垂直であらねばならぬ。この事を忘れてゐるやうである。これは少しくその都度都度師匠なり先輩なり父兄なりのところその現場を見付け、注意をして止めさせるやうにしなくてはいかぬ。甚だしきは毛筆の軸の毛のつけ根の處を固く握つて書かうとする。つまりこれは鉛筆のときの要領をその癖の通り繰返さうとするのである。見てゐない時は童男童女はかう云ふ變則なことをくり返してゐるのである。事はつまらないことのやうであるが決してそのまゝ許しておくべきものでない。それは本當の毛筆の執法に叶つてゐない邪道に陥つたものである。八釜しく責め立てたとて直りにくいものであるが是非と

もこれは矯正せねばならぬ事である。支那にはかう云つた馬鹿げに悪癖はどこにも見ない。こゝには單にその毛筆愛の角度からその文人墨客の風懷につき判り易い方面の話を叙べたまでである。讀者幸に之を諒とせられんことを。

五 硯筆清虛

硯と筆について大要を述べ了つた。昨今、日本の書道界は大分賑かな展覽會が催されたり書道誌が發刊されたりしてゐる。かゝる際には硯筆から紙墨文鎮と各種の文具の研究や蒐集があるのは自然の勢である。しかし書道がいくら盛大であつても單なる臨摹で終るのでは物足りぬ。硯筆にても唯集めて鍾愛するだけでは意味をなさぬ。古硯名硯の有する徳をよろしく深く究め之を我が心にとり入るゝことである。その在銘によつて古人を偲び、その石品によつて自分を研くに在るのである。古硯の徳を味ひ之を座右から離さないやうにしてゐると自然に心の中に名硯が溶け込んで來る思ひがする。水ごころに魚ごころと云ふか、古人の所謂、水清くして魚、月を讀み、山靜かにして鳥、天を談ず、と云つた境地に愛硯家の心を持つて行くことが出来る。もともと古硯名硯の趣味は枯淡清虛の境涯に出入してゐる雅人の抱懷するところである。必ずしも半窓に竹

月を賞し、榻に琴書を弄ぶと云ふ老爺の徒事ではない。しかしいくらむさ苦しい場末のめしやに行つても扁額に「吟香閣」と云ふのが掲げられてゐる。氣韻に唆られて這入つて見ると、卓上思ひがけなく、端溪の長方硯が見つかりたりなどする。聯に云ふ井竈餘處あり、林園俗情なしなどがある。古硯の氣分がそのまま暗示されてゐると見らるゝ。

古硯趣味に名筆の面白みと云ふものは風人の心眼に照して見ると實に鹿門大隱多しとか、山水清音ありとか云つた境地がそのまま物語られる、その境地に古硯は悠久な生命と高雅な風懷を堅持してゐるものと考へらるゝ。思ふに古硯そのものはいくらその市井の陋巷にあらうと、林園の佳室にあらうと硯そのものの本質に變る處はない。若しそれ山中の幽居風人の側におかれると、その背景が誠に古硯にふさはしく、溪靜かにして、雲、石を生じ、窗は虛にして月、紗を弄すと云つた實況を見る。こは井竈林園の對句と共にあちらの愛硯家の最も好む句なのである。即ち、

井竈有餘處

林園無俗清。

溪靜雲生石

毛筆の愛玩

窗虚月弄紗。

二度三度と誦じ繰り返してゐると眼前にいいよ風人の環境が浮んで来るやうである。若しそれ本當に古硯名筆を以つて時局を救ひ、大局を收拾せんとするならば、外交工作の間にかうした場面を用意し長笑高柳に對し、貞心古松に比すと云つた聯句でも相見て語り合ふのである。折角文字と詩趣を同じうしてゐるお互であるからかゝる氣韻生動の雰圍氣に古名硯を十二分に役立たしむるは、翰墨氣分を最も適切に發揮せしめたことになる。これは又必ずしも不可能の事でない。要は時とその人に在る。そしてその背景と媒介は山水、古名硯に在ると云ふ事になる。古硯、名筆を中心としその墨場を樞軸とする舞臺は何といふ意義深き使命を有してゐる者であるか。蓋し測り知るべからざるものがあると云へるのである。

硯と筆の結語

唐の柳公權が硯を褒めて云つてゐる話のうちに、硯を蓄ふるなら、青州（紅綠石）を以つて第一となすべしと云ふ言葉は古硯の聲價を揚げた最初の序開きであると云へる。その後五代の李公主が硯を愛し、龍尾（歙州石）を以つて澄心堂の紙、李廷珪の墨と共に天下の冠也と激賞してゐることや又宋蘇東坡が萬石君羅文傳と云ふ小説を書いてゐるのであるが、この東坡の筆から端溪石が歙州羅文を出しぬき文人墨客の寵愛をもつばらにしたことが窺はるゝ。固より硯材そのものは端溪としては唐初既に下巖龍巖の開坑のあつたことが雲林石譜あたりに見えてゐる。次で宋代治平年間に盛に美材が掘り出されてゐる。治平坑の宋端溪は今以つてその端石中の大きな存在として認められてゐる。

古い昔の硯石には瓦當で作られたものや虢州の澄泥などもあるが何としても石の硯の普及力の大きいのに及ばぬ。又ひろく宣揚せられてゐる美硯、名硯と云ふものも石の硯に多い。古くから硯とか研とか云はれてゐる文字成生の徑路から考へてもその石扁であることから硯は元來石製で

あつたことがわかる。古硯美の宣揚と云ふ事は支那の人々の氣分に叶つたことであり、又古來大陸人一般の精神の打込まれたものであるのだ。支那及び支那人の持つ性格は遺憾なくこの古硯美の中に織り込まれてゐるとも云へる。畏友井上源太翁は長く齊魯の故地に在つて古硯美の研究に没頭せられ古硯美の鑑賞と云ふ一書を先年公にされた。そして云ふに支那をよく知るには古硯美を究めなくてはいかぬ。古硯美のよくわかる人ならば、支那の事をよくわかる人である。つまり古硯は支那の縮圖であるとしてよいのだといふ意味の事を宣揚してゐらるゝ。實に至言である。古硯の宣揚については徳川時代和漢研譜の刊行があつて以來わりに廣く知らるゝに至つた。明治年間には島田重禮博士、向山篁村、子爵山口弘達翁（蕙石）翁、伯爵宗重望（星石）翁、それに犬養毅（木堂）翁などがあり、大分和漢兩方面の古硯研究がなされてゐた。大正に入つてからは自分共山口蕙石子について先人の研究苦心の跡を學ぶところがあり、大正六年には硯行脚を大陸に延長し親しく安徽省歙州の硯山探検に出かけ棧嶺雄關を跋渉して歙州原石を得又翰墨硯工老爺を相手に古硯美を談じたりなどしたのである。

古硯の掘り下げた話は親しく大陸に渡り、硯材の出る山に入り又硯工と面語することにより一段の蔗境に入らるゝものである。自分は二十何年前のこと、參州鳳來寺へ行き硯材の出る溪流に

入つた。加藤恒忠（拓川）翁とその材を鑑しながら跋渉した思ひ出などもある。道中豊橋の岡田旅館にて岡田久次郎君に落合ひ拓川翁に紹介し硯談にも及んだことがある。すべて硯談は現地を試むるなら一種新鮮な風味を覚え又その美材について認識を深め得る。單なる古書の涉獵のみでは徹底しない。更に硯石の性格を十分確めんとするには、科學的方面にその實驗の歩武を進むべきこと無論だが、それにはおのづからその人ありで自分はその方に深入りしない。むしろ理論を離れてかの地の文人愛研家に接したり、古硯美に浸つたりなどして出來得る限り各種各様の澤山の古硯を鑑賞することの機會を得ることに努めた。端、歙、紅絲、綠石、蒲江、興化、潞溪、澄泥、陶磁、瓦當などその硯の姿したものは幾萬となく手にし鑑賞しても見た。その間古硯そのものの氣持になり澄まして見るの機會も多かつた。いかなる僻陬の地でも古硯美を語る場面に氣まづい事態の起り得るわけはない。いつも春風駘蕩である。その雰圍氣を日本にも作つて見たいと云ふ心持が動いたのが抑もの洗硯の動機なのである。そこで東京で犬養翁や山口子、加藤拓川翁などと頻繁來往。此の頃書齋で故人の手紙をしらべて見ると木堂翁から八十八本拓川翁から七十本と云ふ硯石問答の書簡が出て來た。多くは石品のことや硯銘についての往復文書である。そのうちにそつくり支那で唐様表装に仕立てゝも見たいと考へてゐる。

東都愛硯の雅會であるが、これは北京や、青島、上海、廣東、漢口、南京、長沙あたりでも平和の時分には隨時個人的に催されてゐたものである。東都は比較的晚かつた方である。固より個人的にはその邸宅で、それぞれ犬養邸、加藤（恒忠）邸、山口子邸、武内（金平）邸、高山（長幸）邸、山本（悌二郎）邸、郷（誠之助）邸、松方（正作）邸あたりで屢々催された。わけても藤村（義苗）邸では盛に展觀の催しがくり返されたのであつた。そして三三五誘ひ合せたり持寄りたりなどした。至つてなごやかな催しをしてゐたものである。處が度重なるうちに都合のよいどこかへ持出してやつたらと云ふ事になり、大正七年確か春の頃であつたか、北京歸朝の土屋禎二君が百面近い古名硯を東京晚翠軒の樓上に陳列し、大方の清鑑を仰ぎたいと云ふ事になつた。丁度話がこちらでもあるときであつたので、それが面白く催された。次で同年十一月九、十兩日に亘り同じく晚翠軒で第二回洗硯會として武内翁の藏硯（端七十九面、歙州、澄泥それからそれ以外のものをこめて、總計二百二十五面）が陳列せられたと云ふ風である。

やがて持寄り會にして今少しく規模を大きくしたらと云ふ事になりこゝに第四回の洗硯會が大正十年七月九、十兩日にわたり、丸の内生命保險協會で催された。これが東京で洗硯會そのものをそとへ持出した抑も最初なのである。當日の古名硯の出品は三百面、そしてその出品者名を當

時の目録から抄き書きして見ると次の如くである。

山口弘達子	下村 爲山	高橋 虎	對島健之助
岡山 高蔭	加藤 恒忠	正木 直彦	小藤文二郎
田口 米舩	石井 研堂	小野 鍾山	河瀬 早治
竹内 義一	及部 盛種	稻阪 秀松	藤村 義苗
岡村次三郎	伊藤 鼎	武内 金平	川村 種次
大森 頼三	河西 健次	増田 義一	黒木 安雄
渡井 庄吉	兒玉 忠善	齋藤 虎起	井原録之助
井上 清秀	吉田 愚溪	松方 正作	和田 豊治
後藤朝太郎			

このうち藤村翁は六十面、武内翁は四十面、山口子は十面の出品。

次で端歙各硯を中心とした洗硯會の小會が大正十一年二月二十八日東京丸ノ内日本工業俱樂部で催された。催主は藤村義苗翁で臨時に行はれたのである。でも俄かではあつたが百面近いものが寄つた。その出品者の顔ぶれは、次のやうである。

藤村 義苗 和田 豊治

山口弘達子

下村 為山

郡島忠次郎 篠崎都香佐

伊藤 鼎

下村 宏

太田保一郎 荒木 十畝

渡邊 信藏

井上 源太

杖田 春雷 渡邊 晨畝

後藤朝太郎

このうち藤村翁の出品三十面。又晨畝畫伯からは古墨の出品があつた。

第五回洗硯會は大正十一年三月十九日、二十日丸ノ内日本工業俱樂部で行はれた。發起人幹事の顔ぶれは次の通り。

犬養 毅 和田 豊治

加藤 恒忠

加藤 正義

武内 金平 山口弘達子

松方 正作

藤村 義苗

郷 誠之助 後藤朝太郎

喜多 貞吉

出品者は

和田 豊治 武内 金平

篠崎都香佐

堀川寅次郎

出淵 中次 井川 仙唾

小泉新太郎

松室 致

眞金 小園 小野 鍾山

有賀長雄遺族

加藤 恒忠

藤村 義苗

伊藤 鼎

榊原 浩逸

山口弘達子

後藤朝太郎 岡田信一郎

河東石經清

中村 宏

古城 貞吉

倉知 鐵吉

井上 源太

兒玉 忠善

油谷 恭一

杖田 春雷

渡邊 晨畝

稲阪 秀松

竹田 常次

荒木 十畝

殿井 隆興

宮本 仲

玉木 懿夫

阪正 臣

吉田 淳

桑原 忠夫

下村 為山

及部 盛種

渡井 庄吉

有賀 長文

河野久太郎

升本 喜龍

小貫 慶治

内海 羊石

川北 幸壽

山本悌二郎

遠藤 於菟

伊勢田 隆

石井 研堂

柴田 源一

賀古 鶴所

當日の出品點數は二百餘面に達した。このうち二十面以上陳列された方は和田、武内、藤村の三氏であつた。呼物としては河野氏の宋治平坑壁石謝枋得舊藏大研が北京より送られ又湖南長沙から柴田少佐の端溪水巖大西洞の龍池研などがあつた。一々の目錄の品名はこゝに省しておく。

尙特殊の會としては洗硯會の紅絲石研究の小會が大正十一年六月二十六日日本工業俱樂部で催され、犬養、和田、兩加藤、武内、山口、松方、藤村、郷、後藤、喜多等十一連名で刷物が出來た。和田翁は當時山東省青州の現地から紅絲石をとりよせらるゝので天下を睥睨してゐる概があつた。出品者は次の通りであつた。

山口弘達子	和田 豊治	藤村 義苗	佐羽徳太郎
宮里熊五郎	山科多九馬	林 文昭	加藤 恒忠
伊藤 鼎	後藤朝太郎	江藤 濤雄	加藤 正義
太田保一郎	武内 金平	有賀 長博	
犬養 木堂	正木 直彦	藤村 義苗	平島 二郎
篠崎都香佐	武内 金平	就 和 軒	後藤朝太郎
官崎 龍介	官崎 穂子	林 熊光	竹岡 陽一

當時紅絲硯の反響のいかに大きいものであつたか。その頃日本橋白木屋に催された東津文房具展の参考室に端款以外尙紅絲石の陳列を見た。そのときの参考陳列出品者の名を見るとかうである。

鈴木 雪紡	磯野 吉雄	島 郁太郎	守尾保太郎
井上 恒一	小原榮治郎		

東京はその翌年大震災で古硯どころでなくなり古名硯の話もどこへか消し飛んだ形であつた。處が關西に於いては關東の大震災のあと大正十二年十一月廿三日から三日間支那古名硯の陳列が京都や大阪の高島屋樓上で催されたのである。

明治から大正にかけての古名硯の宣揚は、少なくとも自分の關知してゐるところでは大要かくの如くである。又二三自分の拙著を公にした事もあり雑誌や新聞に出したこともある。昭和に入つてからは七年五月、五・一五事件で犬養翁の磔れた爲めと云ふわけでもないがやゝ自分も遠のいてゐた。渡支遊歴、風物行脚に著述の材料をあさる事が忙しくなつた。然し前々いつも云つてゐる通り東亞の硯、筆の事は、善鄰友好上最も重い役割りを有する一大分野なのである。之を樂隠居や、左團扇の連中の徒事でもある如く軽く考へたならば頓でもない考へ違ひだと云ふべきである。古硯美の宣揚とその實地の研究、鑑賞につき先人が如何に苦心してゐるか、又如何に努力してゐるか。その邊について其の味、芝蘭の如きものあるを思ひ、大陸の士君子と友好關係を密にし愈々お互にその心を許し風懷を語ると云ふ境地に向つて進む用意に備へたいと思ふのであ

る。古硯の認識と鑑賞の事は外の事とちがひ急に慌て、泥繩式に出来るものでない。お互は忙中閑を得て之に手を染め、西人の這入らんとして這入り得ぬ東洋獨特の幽玄境なることを再認識し、之を享有してゐらるゝことこそ却つて東亞民族の幸福とする處である。折角古硯の寶を有してゐながら之を等閑視する如き事があつては相濟まぬ譯であると云ひたいのだ。この事は日本側ばかりでなく中國人側にも我が微衷を述べて悠久なる賛同を得たいものだと考へてゐる次第である。

筆と硯

—12 選著名東大—

検印

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

昭和十六年九月十五日印刷
昭和十六年九月二十日發行
定價一圓八十錢

著者 後藤朝太郎

發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 萩原芳雄
東京市牛込區山吹町一九八

株式會社 大東出版
東京市芝區芝公園七號地十番
振替東京一九四七一
電話芝三九四四番

◇選著名東大◇

文學博士 鈴木大拙著
禪の諸問題
禪學界第一人者が禪の本質をあらゆる角度より考證探求した名論集。不可解なる禪は茲に躍如として眞生命を露呈す。
¥1.80 -1-

加藤 咄 堂 著
日本風俗志(一)
風俗志は生活、民俗、傳説の文化史である。本書は咄堂翁の名著として多年喧傳され來つたもの。本巻には總論と關東篇を收む。
¥1.80 -2-

醫學博士 諸岡 存著
茶とその文化
日常生活に最も親み深い茶に就て、一切の研究、考證、嗜好を科學、歴史、文化、政治、道徳、宗教、醫學等の各項に分つて詳述す。
¥1.60 -3-

岡本綺堂著
歌舞伎談義
いはゆる綺堂物の新歌舞伎劇を以て一世を風靡した著者が、吾が傳統的國劇に對しての正しき理解と鑑賞を示唆する芝居入門書。
¥1.80 -4-

文學博士 椎尾辨匡著
佛教要領十講
佛教は人間思想の究極、又東洋文化の結晶でもある。茲に佛教學界の泰斗椎尾博士が、その深遠な教理の大綱を懇述する。
¥1.80 -5-

文學博士 木村泰賢著
印度思想史
我が印度哲學界の巨星たる著者の手にかゝれば難解無味なる宗教論策も其の要と髓とは忽ち躍如とし表出さるゝの概がある。
¥1.80 -6-

◇選著名東大◇

三田村鳶魚著
江戸の風俗
鳶魚翁の江戸研究物はなぜ面白いのか？一筋に江戸文化の闡明に四十餘年の研鑽を過したことの偶然でないことを本書にも見る。
¥1.80 -7-

上司小劍著
生々抄
萬物流轉の相の中に、著者の犀利なる文明批評眼を通じて、痛苦を堪へ、煩惱を克服する暖き宗教的生々の眞意義を見出す。
¥1.70 -8-

正宗白鳥著
空想と現實
文壇の著者白鳥翁の最近の評論感想集。特異の風格と鑑賞の世界に、情理の兼ね備はつた達人の境を示す。
¥1.70 -9-

岡本かの子著
散華抄
一代の才媛かの子の子女史の代表著作。叙事あり抒情あり、論策あり、藝術あり、宗教あり。眞理の風光は全巻に躍如として漲る。
¥1.60 -10-

加藤 咄 堂 著
日本風俗志(二)
質實剛健の東北、氣候温順にして物資の豊かな中部地方、人情にも民俗にも自らなる特色がある。豊かな資料と見聞を見よ。
¥2.00 -11-

後藤朝太郎著
硯と筆
硯の研究、鑑賞に於て最高權威たる著者が、東洋的趣味の精髓を紹介するために新しく書下ろしたもので、懇切を極む。
¥1.80 -12-

◇ 選 著 名 東 大 ◇

文學博士 辻善之助著

日本人の博愛

日本民族の血の中に勇武と同時に博愛の精神が脈々として流れてゐる。本書はこの麗しい史的事實と史料を全面的に輯録す。

¥ 1.80 —13—

山上八郎著

兜の研究(上)

兜の形は時代と共に變り、人と共に異なる。本書はその千様萬態の形を悉く紹介す。著者は甲冑研究で學士院賞を授與された權威者。

¥ 1.80 —14—

直木三十五著

日本劍豪列傳

古來謳はれてゐる劍法の諸豪を論評し、その技術と精神を究明す。著者の氣魄と筆力はかく我が獨特の劍法至高の到達境を明示す。

¥ 1.80 —15—

文學博士 志田義秀著

日本の傳説と童話

我が國民の幼兒を訓育し來たれる五大話の原型は如何なるものか。本書は五大話外兒童に親まれつゝある傳説の由來を研究せるもの。

¥ 1.80 —16—

森 銑三著

書物と江戸文化

江戸時代の學者文人にどんな著書があつたか未だ世に知れない然もこの時代を觀るに重なる興味ある書物二十幾種を時代順に紹介す。

¥ 1.80 —17—

加藤咄堂著

日本風俗志(三)

冬季は雪に鎖される北陸の我同胞は如何に雄々しく生活して來たか、近畿地方は久しく皇都の地、我國文化の中心地、風俗の源泉地。

¥ 2.00 —18—

925
79

終

